

# 西谷横穴墓群第2支群発掘調査報告書

2007年3月

出雲市教育委員会

# 西谷横穴墓群第2支群発掘調査報告書

2007年3月

出雲市教育委員会

## 序

出雲市大津町に位置する西谷横穴墓群第2支群は、国指定史跡 西谷墳墓群保存修理事業に伴い指定地内で確認された横穴墓群です。この横穴墓群は従来確認されてきた横穴墓群の中でもとりわけ脆弱な岩盤に掘られており、当時の墓制や築造技術を考えるための新たな資料を提供することができました。

本書は今回の調査結果をまとめたものです。本書が多少なりとも地域の埋蔵文化財に対する住民の皆様の理解、学習の助けとなれば幸いに存じます。

なお、発掘調査をするにあたり、地元の方々や関係各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

出雲市教育委員会  
教育長 黒目俊策

## 例　　言

1. 本書は、出雲市文化財課が実施する西谷墳墓群保存修理事業に伴い平成17、18年度に実施した西谷横穴墓群第2支群発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。  
平成18年2月8日～4月27日
3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。  
出雲市大津町3596番地6
4. 調査は次の組織で行った。  
平成17年度(現地調査)

○平成18年2月8日～3月31日(現地調査)

調査指導	渡辺　貞幸	(鳥取大学法文学部教授)
丹羽野　裕	(島根県教育庁文化財課主幹)	
原田　敏照	(　同　文化財保護主事)	
事務局	神門　勉	(出雲市文化観光部文化財課　課長)
川上　稔	(　同	主査)
調査員	遠藤　正樹	(　同　主任)
曾田　辰雄	(　同	主任)
米田美江子	(　同	主任嘱託員)
高橋　亜紀	(　同	臨時職員)

平成18年度(現地調査・報告書作成)

○平成18年4月1日～4月27日(現地調査)

事務局	石飛　幸治	(出雲市文化観光部文化財課　課長)
花谷　浩	(　同	学芸調整官)
川上　稔	(　同	主査)
調査員	遠藤　正樹	(　同　主事)
米田美江子	(　同	嘱託員)
高橋　誠二	(　同	臨時職員)

○平成18年4月1日～平成19年3月31日(報告書作成)

事務局	石飛　幸治	(出雲市文化観光部文化財課　課長)
花谷　浩	(　同	学芸調整官)
川上　稔	(　同	主査)
調査員	遠藤　正樹	(　同　主事)
高橋　誠二	(　同	臨時職員)
勝部　真紀	(　同	臨時職員)

5. 本書で示した方位は真北を示す。

6. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

7. 本書掲載の遺構実測については、遠藤のほか、川上　稔(文化財課　主査)、曾田(～平成18年3月　同　主任、平成18年4月～　同　主事)、米田、阿部智子(同　嘱託員)、坂根健悦(～平成18年6月　同　臨時職員、平成18年7月～　同　嘱託員)、高橋誠二、高橋亜紀、佐藤睦子、伊藤悟郎(以上　同　臨時職員)、米田　健(立正大学学生)が行い、遺物実測については、高橋誠二、勝部(～平成18年6月　文化財課　室内作業員、平成18年7月～　同　臨時職員)、鶴口令子(同　室内作業員)が行った。また、写真撮影については、遠藤が行った。

8. 本書の執筆、編集は遠藤が行った。

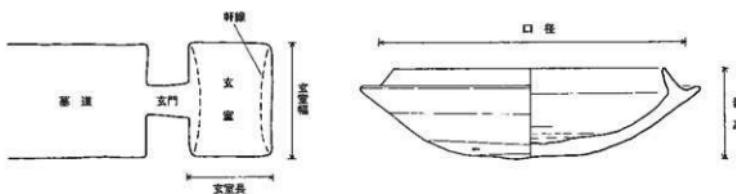
9. 鳥取大学医学部教授　井上貴央氏、同助手　川久保善智氏からは玉稿を賜った。

10. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々(職名は現職)に御指導、御協力を賜った。井上貴央(鳥取大学医学部教授)、川久保善智(～平成19年2月　同助手、平成19年3月　佐賀大学医学部医学科生体構造機能学講座　解剖学・人類学分野助手、平成19年4月～　同助教)、中村唯史(島根県立三瓶自然館サビメル指導員)、西尾克己(島根県教育庁文化財課企画幹)、守岡利栄(島根県古代文化センター主任研究員兼古代出雲歴史博物館主任学芸員)、角田徳幸(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター主幹)、大谷晃二(島根県立松江北高等学校教諭)

11. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事していただいた。

飯國陽子、今岡佳織、鶴口令子、遠藤恭子、勝部真紀、中島和恵、水田節子、渡部裕美

# 凡 例



# 目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 位置と環境.....	(遠藤) .....	1
第2章 調査に至る経緯.....	(遠藤) .....	5
第3章 調査の成果.....	(遠藤) .....	5
第1節 調査の概要.....	5	
第2節 遺構と遺物.....	5	
第4章 考察.....	(遠藤) .....	29
第1節 横穴墓について.....	29	
第2節 横穴墓の立地と閉塞石について.....	30	
第3節 盜掘坑について.....	32	
第5章 小結.....	(遠藤) .....	34
第6章 自然科学分析.....	(川久保・井上) .....	35
西谷横穴墓群第2支群2号横穴墓から出土した人骨について.....	35	

出土遺物観察表

写真図版

抄 錄

## 第1章 位置と環境

南北を山地に挟まれた出雲平野は、南側の中国山地から北流してきた斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された平野である。現在の斐伊川は出雲平野で東流し宍道湖に注ぎ、神戸川は西流して日本海に注いでいる。出雲平野がこのような景観となったのは、江戸時代の松江藩の水利政策に依るところが大きいが、奈良時代に勘造された『出雲国風土記』には、出雲平野西部に、周囲約18kmに及ぶ「神門水海」という潟湖が存在していたことが記載されており、広範囲を汽水域が占めていた。この時代の斐伊川・神戸川はともに西流し「神門水海」に注いでいたようである。

西谷横穴墓群第2支群(1)は、斐伊川西岸に位置する西谷丘陵の東側斜面で確認され、丘陵上に所在する国史跡 西谷墳墓群(1)の指定地内となっている。

### 縄文時代

出雲平野の遺跡の初源は縄文時代早期末で、平野北西端の菱根遺跡(41)と平野西部の砂丘下にある上長浜貝塚(50)が知られている。その後も前期末から中期にかけて上ヶ谷遺跡(74)が知られるが、平野南部ではやや遅れ、中期の土器が出土している三田谷Ⅲ遺跡(23)が初源である。後・晩期になると平野縁辺部を中心に遺跡も増え、平野南西部に御領田遺跡(67)、三部竹崎遺跡(66)、南部に三田谷Ⅰ遺跡(23)、染山遺跡(26)、南東部に後谷遺跡(73)、北西部に原山遺跡(48)・出雲大社境内遺跡(44)が出現するほか、平野中央部においても矢野遺跡(35)、善行寺遺跡(31)などの遺跡から、後・晩期の遺物が出土している。

### 弥生時代

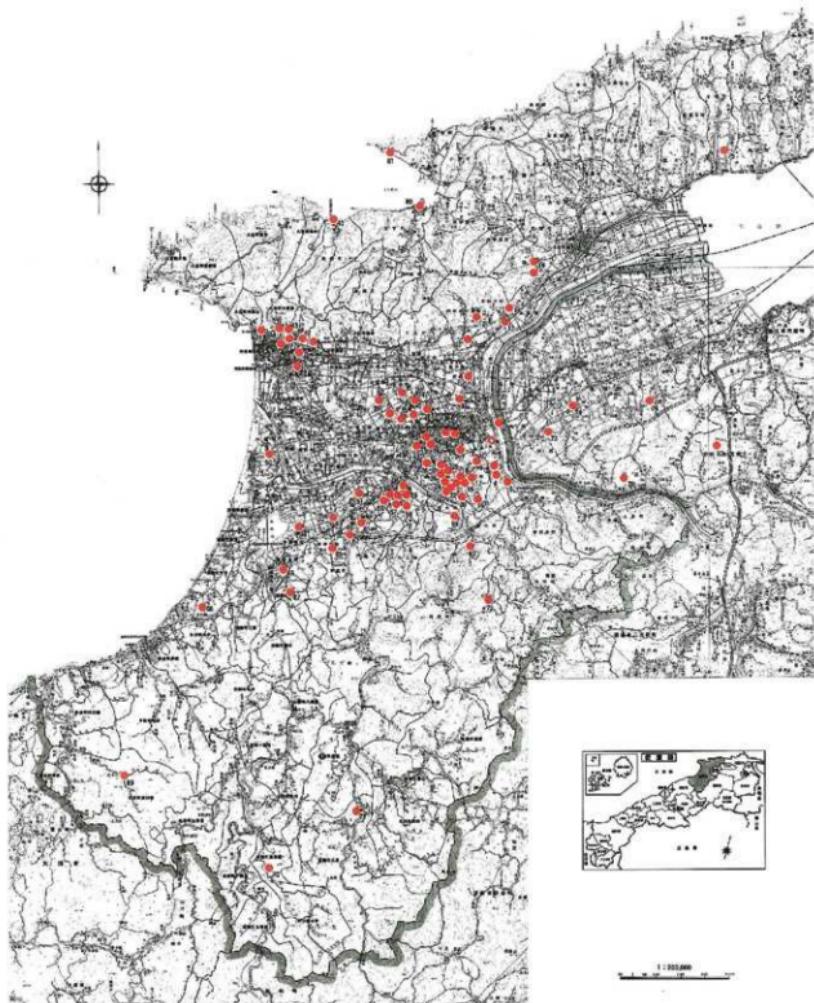
弥生時代前期に縄文後・晩期から継続する浅柄遺跡(61)、三田谷Ⅰ遺跡、矢野遺跡が引き続き展開する。中期になると、斐伊川・神戸川の氾濫による流路の変化や沖積作用によって形成された微高地に、広範囲にまとまった大規模集落が営まれるようになる。その中でも天神遺跡(29)、古志本郷遺跡(52)、下古志遺跡(53)は、環濠の存在が明らかになっており、環濠集落としての大きな居住地が形成されていたと考えられている。その他では矢野遺跡、田畑遺跡(54)、白枝荒神遺跡(38)、知井宮多聞院遺跡(51)、海上遺跡(30)などが知られる。北山山麓の扇状地に立地する青木遺跡(13)からは、初源期の四隅突出型墳丘墓が検出されている。後期になると、平野内一円に遺跡が広がり、小山遺跡(34)、中野美保遺跡(9)、姫原西遺跡(33)など、沖積地上にも集落が営まれる。墳墓では青木遺跡で四隅突出型墳丘墓が引き続き造墓されたほか、中野美保遺跡でも造墓された。一方、平野南側の丘陵上には西谷墳墓群が出現し、丘陵上でも四隅突出型墳丘墓が築造される。西谷3号墓ではその出土土器より吉備や北陸との交流があったことが指摘されている。三田谷Ⅰ遺跡からは出雲地方では珍しい方形周溝墓も検出されている。

### 古墳時代

古墳時代に入ると多くの集落遺跡は衰退するが、古墳中期に斐伊川西岸南部丘陵地の三谷遺跡(3)や長廻遺跡(5)で、土壙や竪穴住居跡が確認されているほか、神戸川東岸南部丘陵地の三田谷Ⅰ遺跡でも多量の遺物とともに竪穴住居跡が確認されている。また平野北東部の山持遺跡(11)では古墳前期から中期にかけての掘立柱建物跡や玉作を示す勾玉・管玉が確認されている。しかしこの時代の集落

の様相には不明な点も多い。

一方、古墳の様相については比較的明確である。古墳時代前期には平野の周辺に、筒形銅器や鏡をもつ山地古墳(64)や県内最古の前方後円墳である大寺1号墳(14)、割竹形木棺を安置した古墳の粘土塊から、布が付着した鉄剣が出土した浅柄II遺跡(62)、西谷墳墓群の一角にある西谷7号墳が築造される。中期に入っても北光寺古墳(65)、西谷15号墳、16号墳などが築造されるものの、古墳の数はあ



第1図 出雲市内の主要遺跡

出雲平野周辺の遺跡一覧表

No	遺跡名	主な種別	No	遺跡名	主な種別
1	西谷横穴墓群・西谷墳墓群	横穴墓・墳墓・古墳	42	修理面本郷遺跡	散布地
2	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	43	良名井遺跡	倒戈出土地
3	三谷遺跡	集落跡	44	出雲大社境内遺跡	神社跡
4	蘆谷山城跡	城跡	45	奉納山経塚	経塚
5	長庭遺跡	集落跡	46	鹿藏山遺跡	施跡
6	菅沢古墓	古墓	47	五反配遺跡	水田跡
7	向山城跡	城跡	48	原山遺跡	散布地
8	今市大念寺古墳	古墳	49	南原遺跡	貝塚
9	中野美保遺跡	集落跡・墳墓	50	上長浜貝塚	貝塚
10	萩谷古墓	古墓	51	知井宮多聞院遺跡	貝塚
11	山特遺跡	集落跡	52	古志本郷遺跡	役所跡・集落跡
12	鳴ヶ瀬城跡	城跡	53	F古志遺跡	集落跡
13	青木遺跡	集落跡	54	田畠遺跡	集落跡
14	大寺古墳	古墳	55	大堤古墳	古墳
15	上島古墳	古墳	56	宝塚古墳	古墳
16	中村1号墳	古墳	57	妙蓮寺山古墳	古墳
17	狐廻谷古墳	古墳	58	放レ山古墳	古墳
18	大井谷城跡	城跡	59	小坂古墳	古墳
19	大井谷古墳	古墳	60	朝山古墓	古墓
20	光明寺3号墓	墳墓	61	浅柄遺跡	集落跡
21	上塙治横穴墓群	横穴墓	62	浅柄II遺跡	古墳・横穴墓
22	半分城跡	城跡	63	神門横穴墓群	横穴墓
23	三田谷遺跡	集落跡	64	山地古墳	古墳
24	上塙治地藏山古墳	古墳	65	北光寺古墳	古墳
25	上塙治紫山古墳	古墳	66	三郎竹崎遺跡	散布地
26	篠山遺跡	古墳	67	御領田遺跡	集落跡
27	宮松遺跡	集落跡	68	雪州久邑長沢焼窯跡	窯跡
28	神門寺境内庵寺	寺院跡	69	吉本鍛冶山内遺跡	製鉄遺跡
29	火神遺跡	集落跡	70	朝日たら跡	たら跡
30	海上遺跡	散布地	71	八幡古墳	古墳
31	善行寺遺跡	散布地	72	上柳桜跡	株跡
32	城山古墳	古墳	73	後谷遺跡	役所跡
33	鄭原西遺跡	その他	74	上ヶ谷遺跡	散布地
34	小山遺跡	集落跡	75	木舟廻跡群	廻跡
35	矢野遺跡	集落跡	76	神庭荒神谷遺跡	青銅器埋納地
36	蕨小路西遺跡	跡跡・集落跡	77	加茂岩倉遺跡	青銅器埋納地
37	渡橋冲遺跡	館跡・集落跡	78	天寺平魔寺	寺院跡
38	白枝荒神遺跡	散布地	79	大井谷II遺跡	寺院跡
39	井原遺跡	集落跡	80	河下台場跡	台場跡
40	猪目洞窟遺跡	洞窟	81	網屋浜台場跡	台場跡
41	菱根遺跡	散布地			

まり増加しない。後期に入ると多くの古墳が築造されるようになり、神戸川東岸に今市大念寺古墳(8)、上塙治築山古墳(25)、上塙治地藏山古墳(24)といった首長墓が連続して築造され、西岸では、放レ山古墳(58)、妙蓮寺山古墳(57)、宝塚古墳(56)などが築造される。また、北山山脈南側の扇状地上には、未盗掘古墳の中村1号墳(16)が知られている。終末期になると徐々に古墳の数は減り、横穴墓の築造が主流となる。特に古墳時代後期より造られ始めた神戸川西岸の神門横穴墓群(約100穴)(63)と東岸の上塙治横穴墓群(約180穴)(21)は、全国最大規模の横穴墓群で、終末期における2大墓域としての性格を持つと考えられる。上塙治横穴墓群では、金糸や装飾大刀を副葬する横穴墓も確認されている。しかし周辺では、三田谷2号墳・3号墳、光明寺4号墳、大井谷古墳(19)、狐廻谷古墳(17)といった後期から終末期にかけての古墳も確認されており、全ての古墳が横穴墓に取って替わられたわけではないようである。

### 古代

古代には出雲平野には神門郡と出雲郡の2つの行政区画が定められた。この「郡」を統括していた官庁が「郡家」である。発掘調査の成果により、神門郡家は古志本郷遺跡、出雲郡家は後谷遺跡周辺に比定されている。古志本郷遺跡では大規模な掘立柱建物跡が検出されており、神門郡家の郡庁と考え

えられているほか、郡家の神戸川を挟んだ対岸にあたる三田谷Ⅰ遺跡から、墨書き土器、「高岸神門」などの木簡、綠釉陶器などが出土し、神門郡の出先機関とみられている。一方、出雲郡の出先機関とみられる青木遺跡からは多量の墨書き・ヘラ描き土器のほか、国内最古級の神像、絵馬、売田券木簡などが発見されている。また平野北西部の鹿藏山遺跡(46)からは、奈良三彩、綠釉陶器、腰帶金具、墨書き土器などが出土しており、官衙施設を含めた性格が考えられている。古代寺院では、『出雲國風上記』に記載される神門郡朝山郷新造院と出雲郡河内郷新造院が、それぞれ神門寺境内廃寺(28)と天寺平廃寺(78)に推定されている。平野南側の丘陵谷奥に所在する大井谷Ⅱ遺跡(79)では、遺跡を南北に横切る大溝から仏教関連遺物が出土しており、遺跡北側に所在する般若寺周辺に古代寺院の存在が考えられている。また、塙治地区及び朝山地区では、石製骨蔵器を持つ古墓で墳丘がある特異な構造を持つ光明寺3号墓(20)が、古墳時代から奈良時代への火葬墓の過渡期の様相を示している。この地域では、県内で確認された石製骨蔵器5例のうち、菅沢古墓(6)、朝山古墓(60)、小坂古墳(59)を含めた4例が確認されている。一方、生産遺跡では宍道湖北岸の東地区(古代の行政区画では櫛縄郡)で、9世紀前半代の窯跡群として出雲地方最大級の木舟窯跡群(75)が確認されている。

## 中世

中世には、出雲守護職の佐々木氏が塙治郷に守護所を置き、塙治地域が出雲国を中心とする。藏小路西遺跡(36)からは、朝山家惣領家の可能性が指摘されている館跡が検出されているほか、渡橋沖遺跡(37)、矢野遺跡、寿昌寺遺跡からも館跡が確認されている。これらはそれぞれ12世紀後半~15世紀前半頃、13~14世紀頃、14~15世紀頃、13世紀頃と考えられている。古墓としては龍泉窯系青磁の優品が出土している萩原古墓(10)が著名であるほか、姫原西遺跡からは木棺墓が検出されている。さらに社寺関連遺跡としては、出雲大社境内遺跡から巨大本殿遺構が確認されているほか、大井谷Ⅱ遺跡からは寺院跡が検出されており、全国的に珍しい瀬戸の灰釉燭台が出土している。山城は市内の各所に点在しているが、向山城(7)、大井谷城(18)、半分城(22)、瀧谷山城(4)などがあり、中でも向山城は、鎌倉時代の悲運の武将、塙治判官高貞の居城ともみられている。

## 近世・近代

近世に入ると、松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は、この改修により一本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。石見銀山の鉱夫を雇って掘らせたとされる只谷間府(1650年頃完成)や、高瀬川の取水口である米原岩樋(1700年完成)は、物資輸送、農業用水の確保、水上交通などに利用された。幕末に風土記社参詣旅行を行った小村和四郎重義の旅行記には、来原岩樋から舟に乗って高瀬川を下り、大津の村へ出たことが記載されている。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を有数の穀倉地帯にした。平野中央部の小山遺跡(第2地点)では、近世の豪農成相家の館跡が調査されている。農業の発展とともに産業の発展も顕著であった。奥田儀の宮本の地では、田儀櫻井家が数百人の従事者を抱えて製鉄業を経営し、出雲西部地域の一大産業となった。その繁栄期には、製鉄の神を祀る金屋子神社や櫻井家の菩提寺である智光院も建立されている(69)。

幕末には歐米諸国のアジア進出に伴い、日本近海に外国船が出現するようになる。出雲西部地域でも松江藩が幕府の命を受け、海防のための台場を設置した。十六島湾でも河下台場(80)、網屋浜台場(81)などが構築されており、当時の松江藩の海防状況を知る上で貴重な資料となっている。

## 第2章 調査に至る経緯

出雲市文化財課は、国指定史跡西谷墳墓群西谷2号墓(四隅突出型墳丘墓)の保存修理に伴い、東側斜面補強工事を計画した。東側斜面では崩落により国指定前から墳丘の一部(北東部の突出部の一部)が失われているほか、急な崖面となっており、補強工事をしなければ更に史跡を損なう恐れがあった。敷地内で確認調査を実施したところ、複数の横穴墓で構成される横穴墓群が確認され、緊急調査が必要となった。

発掘調査は文化財保護法の手続きによる「埋蔵文化財発掘の通知(文化財保護法第94条第1項)」を平成18年2月2日付、文財 第594号にて、「埋蔵文化財発掘調査の通知(文化財保護法第99条第1項)」を平成18年2月7日付、文財 第593号にて提出し、現地調査は平成18年2月8日から開始した。調査は現地の軟弱な岩盤と天候不良により困難を極めたが、4月27日をもって完了し、島根県教育委員会に概報及び意見書を提出した。遺物発見届及び保管証は平成18年5月1日付、文財 第69号にて、それぞれ出雲警察署と島根県教育委員会に提出している。

## 第3章 調査の成果

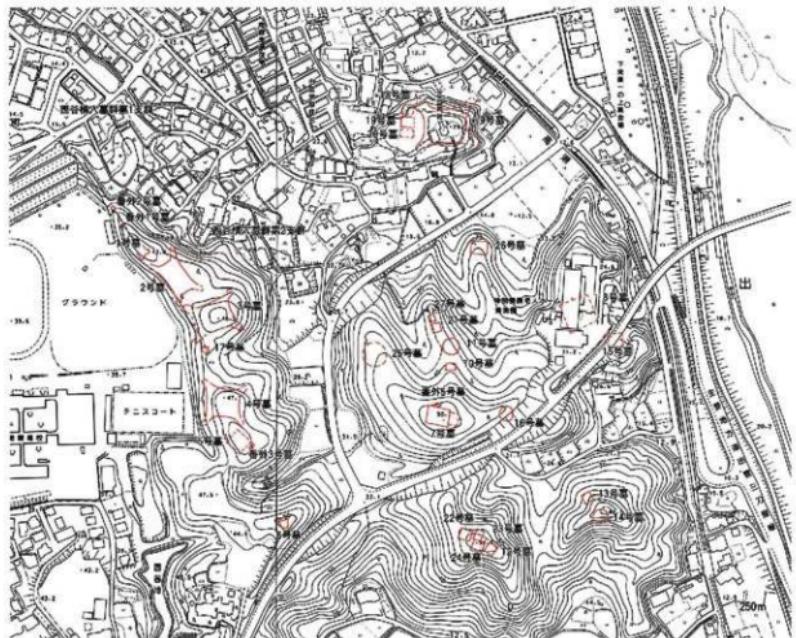
### 第1節 調査の概要

西谷横穴墓群第2支群は、国指定史跡西谷墳墓群指定地内で確認された横穴墓群である(第2図)。横穴墓群が確認された丘陵上には、四隅突出型墳丘墓や古墳があり、当丘陵は横穴墓以前より墓域となっていたと考えられる。この丘陵北側では周知の遺跡として西谷横穴墓(消滅)が所在していたが、今回新たに確認された横穴墓群は、この横穴墓から離れており、被葬者は別グループと推定されることから、西谷横穴墓を西谷横穴墓群第1支群と改称し、今回確認の横穴墓群を西谷横穴墓群第2支群とした。調査では横穴墓10穴、小横穴1穴、加工段状遺構3基、盜掘坑10穴を確認している(第3, 28図)。

### 第2節 遺構と遺物

#### 1号横穴墓(第5～8図)

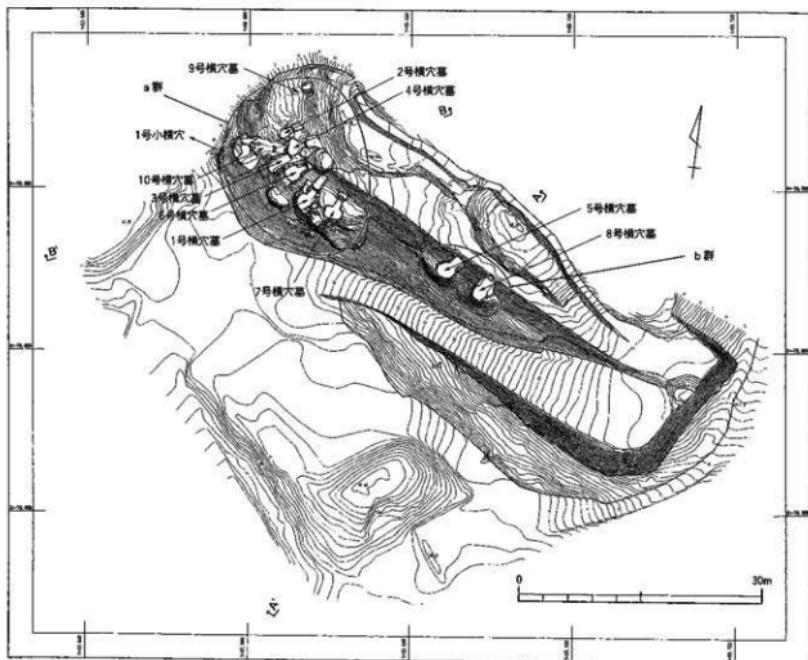
第5図は1号横穴墓で、玄室長2.11m、玄室幅1.87mのいびつな方形状を呈し、正面右側に須恵器床を作る。須恵器床は概ね臺片と横瓶片により構成されている。須恵器床の周囲には排水溝も作られていた。副葬品は豊富で、須恵器、赤彩土器、鉄刀が出土している。玄門は玄室側で幅0.92m、墓道側で幅0.69mを測り、墓道は最大幅1.24m、長さ2.32m以上を測る。墓道玄門側には溝が残り、板などで閉塞されていたものと考えられた。また、玄門墓道側には転石が1つ残存しており、閉塞に使われていたものと考えられる。天井形態はドーム型かアーチ型と考えられる。



第2図 西谷横穴墓群周辺図

第6～8図は1号横穴墓の出土遺物である。

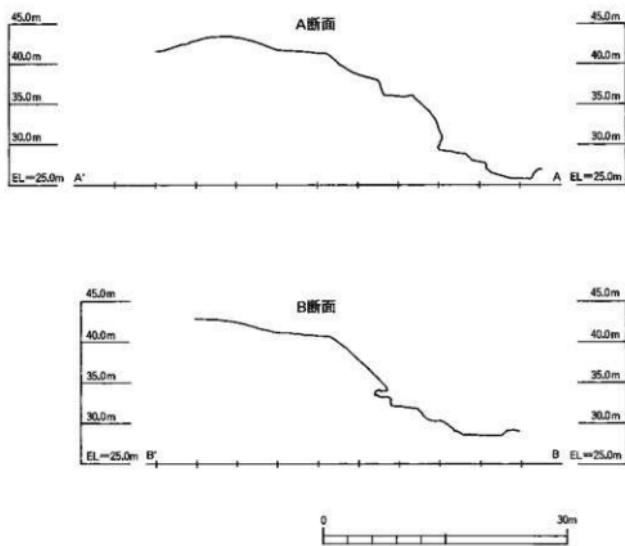
第6図1～3は赤彩土器である。1、2は高坏で、ともに器部内面にナデ調整を施し、外面はハケ目調整を施した後、器部下方はナデ調整している。1は脚部内面は柱部にナデ調整、裾部に若干のハケ目調整が残り、外面にはヘラミガキ調整及びハケ目調整が施されている。口縁部は内湾気味に立ち上がった後外方に直線的に伸び、端部は尖り気味に仕上げている。一方、脚部は裾部から外方に直線的に広がり、端部を尖り気味にしている。全面に赤彩が施されている。2は脚部内面は柱部にヘラケズリ調整、裾部にハケ目調整を施し、外面にはヘラミガキ調整及びハケ目調整が施されている。口縁部は内湾しながら立ち上がった後、外方に直線的に伸び、端部を尖り気味にしている。一方、裾部は外反しながら広がった後、端部は丸く仕上げている。全面に赤彩が施されている。3は小壺で、内外面ともにナデ調整を施し、体部外面にはハケ目調整を施す。口縁部は上方に短く立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。口縁部内外面及び体部外面に赤彩が施されている。4～12は須恵器である。4は壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施すが、肩部外面はカキ目状の粗いナデ調整となっている。一方、底部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部は短く内傾気味に伸びた後上方に立ち上がり、端部は尖らせている。全体の器形は肩部が平坦気味になるほど碇型となっており、肩部外面にヘラ状工具痕が3条残る。5～9は蓋で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、天井部は内面に回転ナデ調



第3図 西谷横穴墓群第2支群平面図

整の後ナデ調整、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。肩部外面に2条の沈線を施し稜を表現している。5は天井部から内湾しながら伸びやや内傾する。端部は丸く仕上げている。6は天井部から内湾しながら伸び内傾する。端部は丸く仕上げている。7は天井部から直線的に広がった後、肩部で屈曲し直線的に伸びる。端部は内傾気味に伸びた後丸く仕上げる。肩部の稜線はシャープに仕上げられている。8は天井部から内湾しながら伸び、端部内側に段を作る。端部は尖り気味に仕上げている。9は天井部から内湾しながら伸び、端部を丸く仕上げている。天井部に赤色顔料による「メ」記号が残る。10～12は壊身で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面見込に回転ナデ調整後ナデ調整、底部は10に回転ヘラ切り調整、11、12は回転ヘラ切り調整後ナデ調整を施す。10は器壁は内湾しながら立ち上がりやや外傾する。端部は丸く仕上げている。かえりは短くやや反り上がり気味に内傾し、端部は尖らせている。11は器壁は外方に直線的に立ち上がり、端部は尖り気味にしている。かえりは内側に直線的に伸びた後や上方に立ち上がる。端部は尖り気味にしている。12は器壁は内湾気味に立ち上がりやや外反する。端部は尖り気味にしている。かえりは内側に直線的に伸びた後、やや括れを持つ。端部は尖らせている。

第7図1～8は  
須恵器である。1  
～5は坏身で、口  
縁部内外面に回転  
ナデ調整を施し、  
内面見込に回転ナ  
デ調整後ナデ調整  
を施す。底部は1、  
2、4が回転ヘラ  
切り調整後ナデ調  
整し、3、5は回  
転ヘラ切り調整を  
施す。器壁は1、  
4は内湾しながら  
立ち上がり外反す  
る。端部は尖り氣  
味にしている。か  
えりは内側に直線  
的に立ち上がり、  
端部を尖り氣味に  
している。2は外

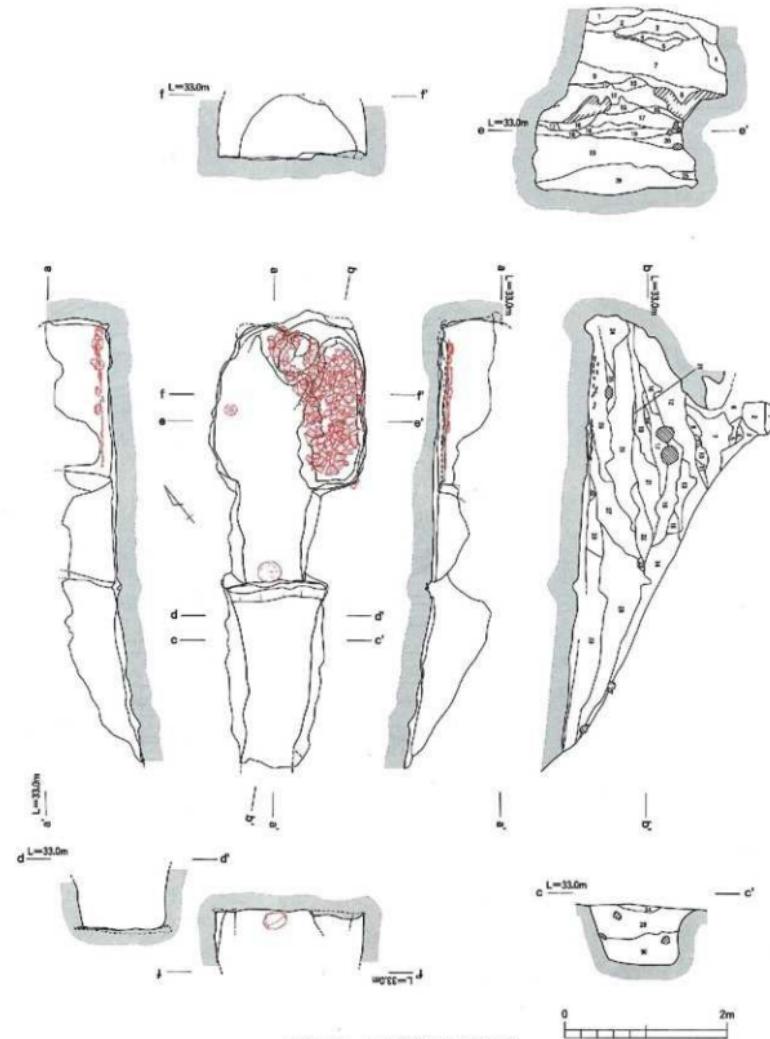


第4図 西谷横穴墓群第2支群立面図

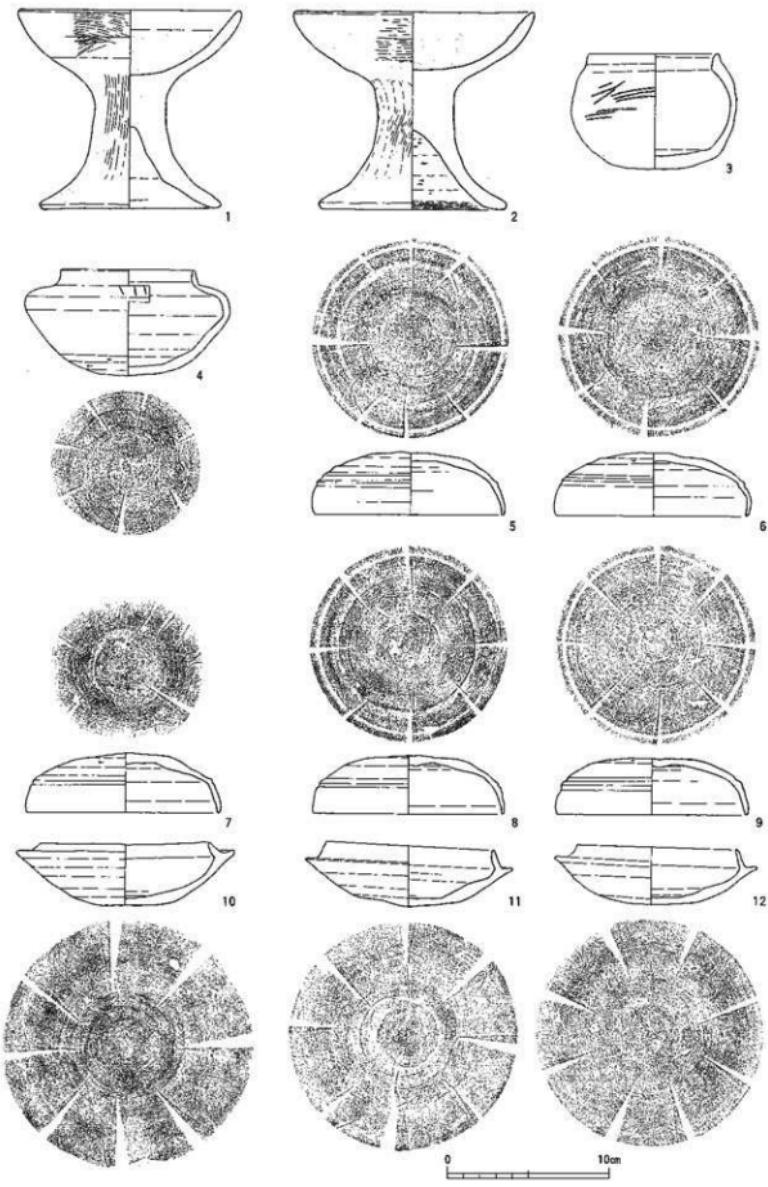
方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は尖り氣味にしている。かえりは内側に直線的に立ち上  
がった後上方に立ち上がり、端部を丸く仕上げている。外面に自然釉が付着している。3、5は器壁  
は内湾気味に立ち上がり、外方に直線的に伸びる。端部は3は尖り氣味に、5は丸く仕上げている。  
かえりは何れも短くやや反り上がり氣味に内傾し、端部は3は平坦氣味に、5は丸く仕上げている。  
6、7は腰で、口縁部内外面、頸部内面、頸部から肩部にかけての外面に回転ナデ調整を施し、平底  
の底部から体部下方に回転ヘラケズリ調整を施す。外面では頸部上方に波状文を施し、下方に6で2  
条、7で1条の沈線が施されている。一方、体部は2条の沈線の間に刺突文が施され、1か所に穿孔  
が施されている。口縁部は6は外方に直線的に立ち上がった後外傾し、端部を尖り氣味に仕上げてい  
る。また7は外方に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。8は壺で、内面に青海波文、外  
面に平行タタキを施す。

第8図1は横瓶で、概ね内面に青海波文を施し、外面に平行タタキを施すが、体部片側には粘土板  
の接合痕が残り、外面にはカキ目調整を残している。2は鉄刀で茎に錆が残る。酸化が著しく軟鉄と  
鋼鉄の接合面で剥離している。3は倒卵型の有窓鉗で、方形状の透かしが残る。間隔から六窓鉗と考  
えられる。

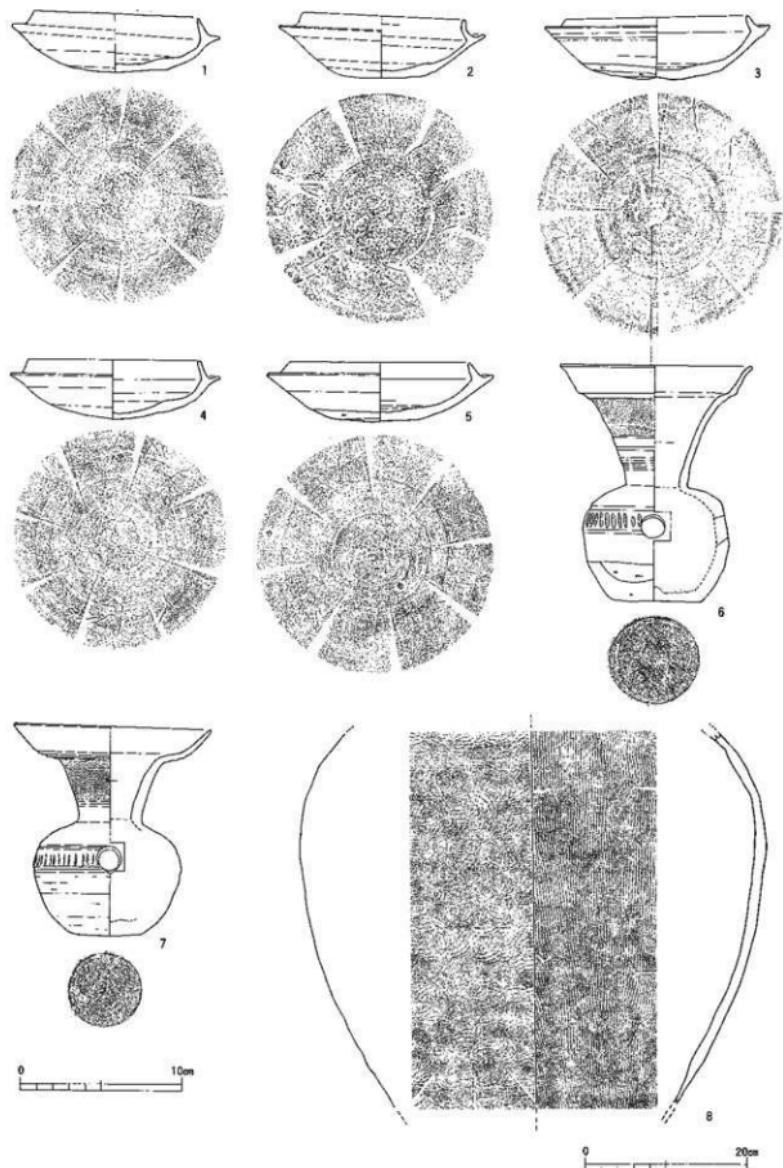
1. 黄褐色粘土  
2. 黄褐色粘土 (地山ブロック多量に入)   
3. 黄褐色粘土 (地山ブロック少量混入)  
4. 黄褐色粘土  
5. 黄褐色粘土 (地山ブロック多量に混入)  
6. 黄褐色粘土 (地山ブロック混入)  
7. 黄褐色粘土 (地山ブロック混入)  
8. 黄褐色粘土 (地山ブロック混入)  
9. 黄褐色粘土 (地山ブロック少量混入)  
10. 黄褐色粘土  
11. 黄褐色土  
12. 黄褐色粘質土 (地山ブロック混入)  
13. 赤褐色粘質土 (地山ブロック混入)  
14. やや暗い黄褐色粘質土  
15. 黄褐色粘土  
16. 黄褐色粘质土 (地山ブロック多量に混入)  
17. 黄褐色土 (地山ブロック多量に混入)  
18. 黄褐色粘土  
19. 深褐色粘土  
20. やや暗い黄褐色土  
21. 黄褐色土  
22. 赤褐色粘质土 (黄褐色土混入)  
23. 黄褐色粘土  
24. 褐色粘质土  
25. やや明るい黄褐色粘质土  
26. 黄褐色土  
27. 明るい黄褐色粘质土 (地山ブロック少量混入)  
28. 黄褐色粘土  
29. 明るい黄褐色粘土  
30. 黄褐色粘土 (地山ブロック少量混入)



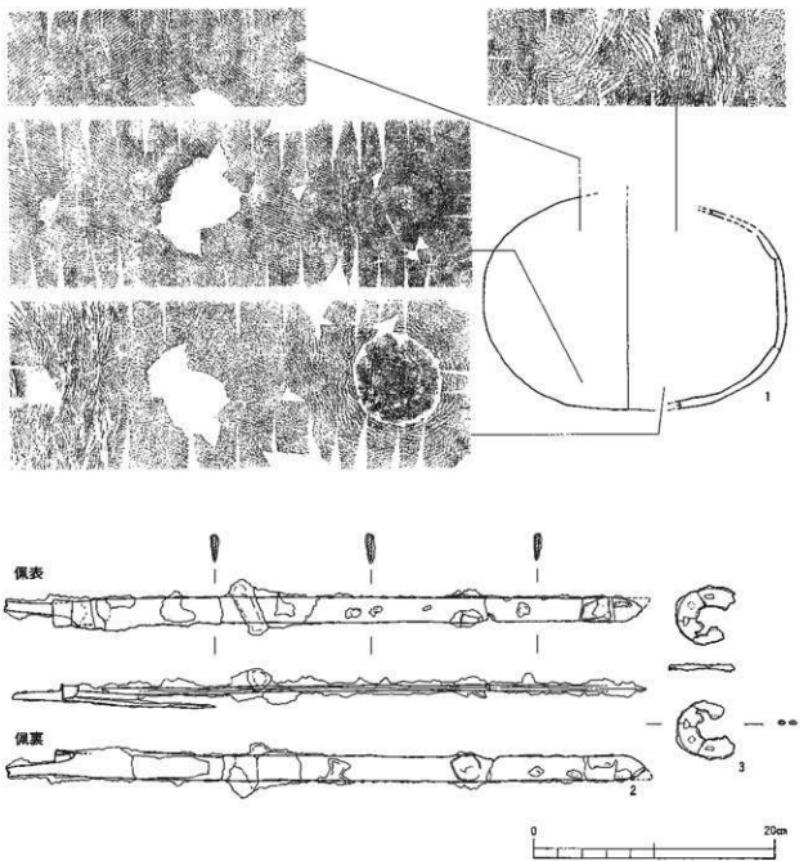
第5図 1号横穴墓 実測図



第6図 1号横穴墓出土遺物 1



第7図 1号横穴墓出土遺物 2

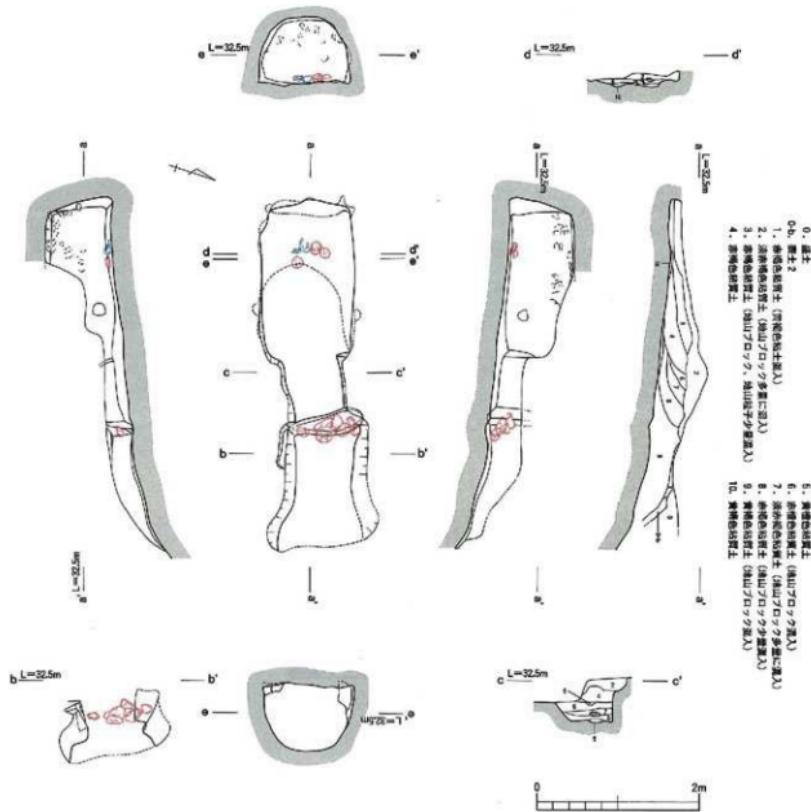


第8図 1号横穴墓出土遺物3

#### 2号横穴墓(第9、10図)

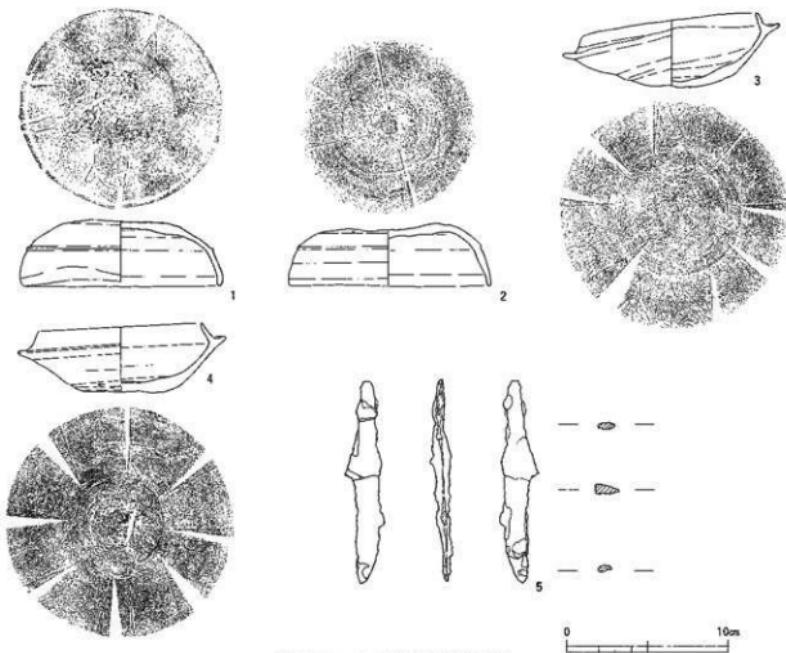
第9図は2号横穴墓で、玄室長2.02m、玄室幅1.18mの縦長長方形状を呈す。両壁面には幅約15cm、高さ約15cm、奥行約8cmの割り込みが施されている。玄室内からは須恵器蓋坏及び鉄鎌が確認されたほか、残存状況は悪いが頭蓋骨や歯牙などの人骨が確認されている。頭蓋骨にはインカ骨が含まれていた。玄門は玄室側で幅0.71m、墓道側で幅0.60mを測り、墓道は最大幅0.92m以上、長さ1.78m以上を測る。墓道玄門側には溝が残り、溝の手前には閉塞石が残存していた。板などを置いた後石を詰めて閉塞したものと考えられる。天井形態はアーチ型である。

第10図は2号横穴墓の出土遺物で、1~4は須恵器蓋坏である。1、2は蓋で、口縁部内外面に回



第9図 2号横穴墓 実測図

転ナデ調整を施し、天井部は内面に回転ナデ調整後ナデ調整、外面に回転ヘラケズリ調整を施す。肩部には1条の稜が施されている。1は口縁部は天井部から内湾しながら伸び、口唇部で内傾する。端部は丸く仕上げている。2は口縁部は天井部から内湾しながら伸びた後、外方に直線的に伸び、口唇部でやや内傾する。3、4は坏身で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、内面見込に回転ナデ調整後ナデ調整を残す。底部は3に回転ヘラ切り調整後ナデ調整、4に回転ヘラ切り調整が施されている。器壁の立ち上がりは、3は内湾気味に立ち上がった後外傾し、端部は丸く仕上げている。かえりは内側に伸びた後やや括れ気味となる。端部は尖らせている。4は外方に直線的に立ち上がった後やや外傾し、端部は丸く仕上げている。かえりは内側に直線的に立ち上がった後やや反り上がる。端部は尖り気味に仕上げている。5は刀子である。



第10図 2号横穴墓出土遺物

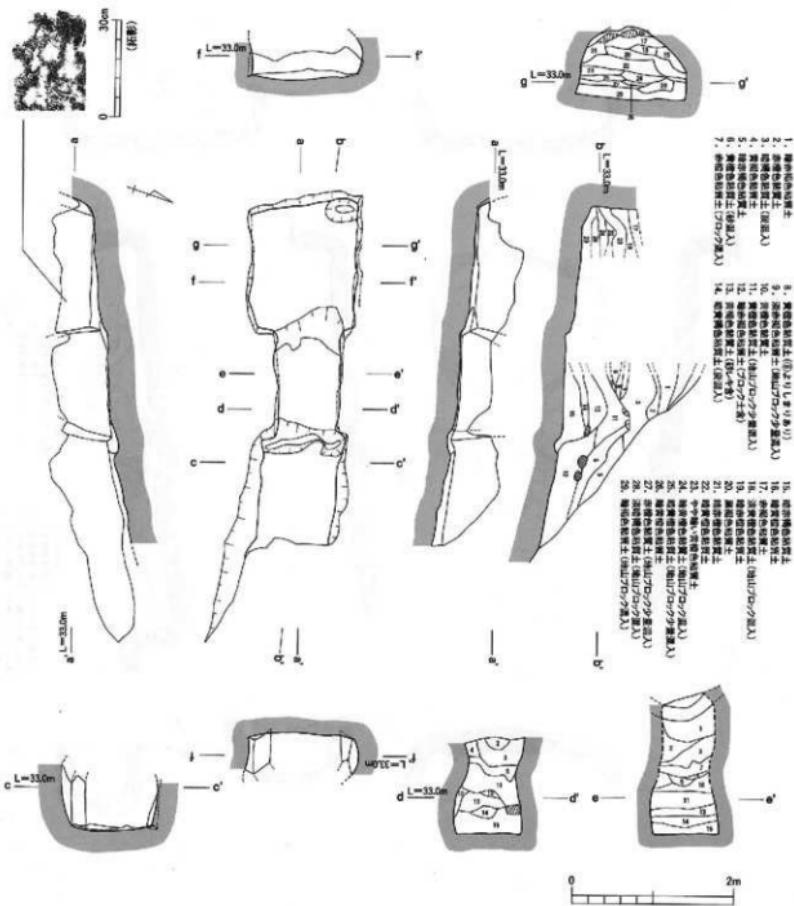
#### 3号横穴墓(第11図)

第11図は3号横穴墓で、玄室は玄室長1.62m、玄室幅1.37mのやや縦長の方形状を呈し、側壁には工具痕が残る。玄門は玄室側で幅0.86m、墓道側で幅0.75mを測り、墓道は最大幅1.03m、長さ1.39m以上を測る。墓道玄門側には溝が残り、板などを置いて閉塞したものと考えられる。天井形態はアーチ型と考えられる。遺物は出土していないが、4号横穴墓の天井と切り合い関係があり、4号横穴墓より新しい横穴墓と考えられる。

#### 4号横穴墓(第12、13図)

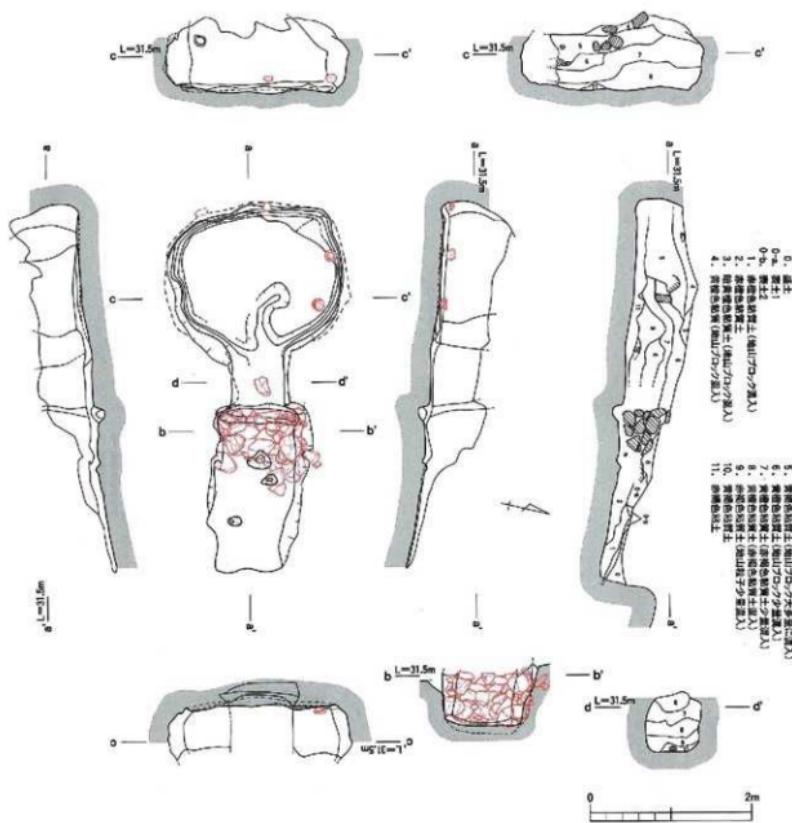
第12図は4号横穴墓で、玄室長1.80m、玄室幅2.17mの円形状を呈し、周間に排水溝を施す。玄門は玄室側で幅0.79m、墓道側で幅0.66mを測り、墓道は最大幅0.99m、長さ2.04m以上を測る。墓道玄門側には溝が残り、溝の手前には閉塞石が残存していた。板などを置いた後石を詰めて閉塞したものと考えられる。天井形態はドーム型と考えられる。遺物は須恵器、石製品が出土しており、また3号横穴墓の墓道との切り合い関係から、3号横穴墓より古い横穴墓と考えられる。

第13図は4号横穴墓の出土遺物で、1~12は須恵器である。1~7は蓋で、口縁部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。1は天井部内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラ切り後



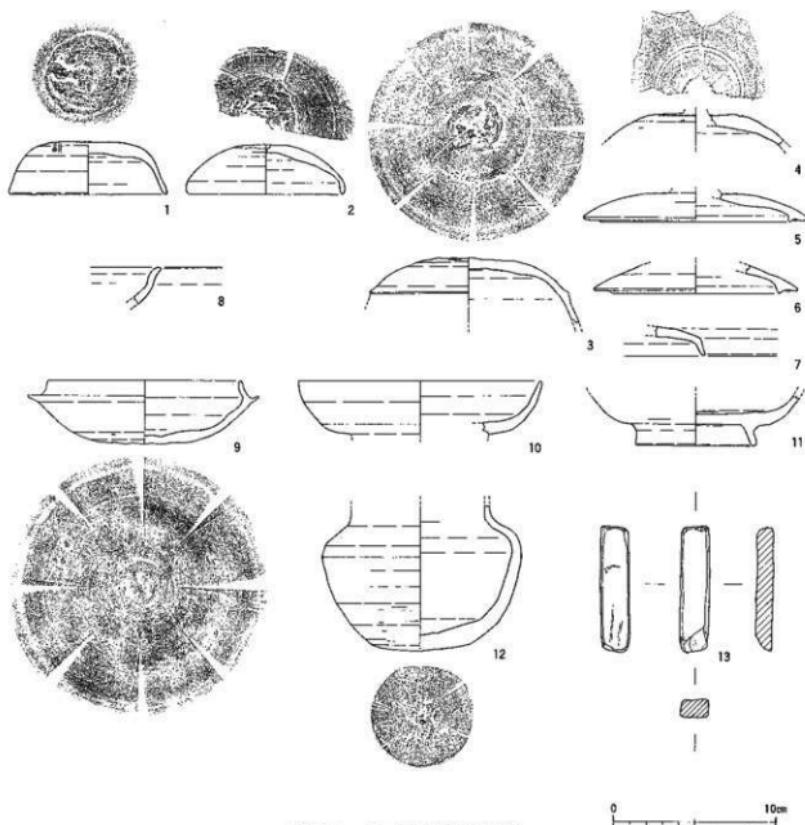
第11図 3号横穴墓 実測図

ナデ調整が施されている。口縁部は天井部から外方に直線的に伸びやや外傾する。端部は丸く仕上げている。2は天井部内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラ切り調整が施されている。口縁部は内湾気味に伸びた後口唇部で内湾し、端部は丸く仕上げている。3は天井部内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、天井部外面には回転ヘラ切り調整を施している。口縁部は天井部から内湾気味に伸び、肩部には沈線を施し稜を表現している。4、5は天井部内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、天井部外面には4に回転ヘラケズリ調整、5に回転ナデ調整を施す。それぞれ摘みを接合していたものと考えられる。立ち上がりは4は器壁は天井部から内湾気味に伸び、5は天井部



第12図 4号横穴墓 実測図

から内湾気味に伸びた後、口縁部内側に低いかえりを施す。かえりの端部は尖らせている。5の外側には自然軸が付着している。6は口縁部は外側に内湾気味に伸び、端部内側に低いかえりを施す。かえりの端部は尖らせている。7は外側に内湾気味に伸び、口唇部で下方に屈曲する。端部は丸く仕上げている。8は内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がった後外反する。端部は丸く仕上げている。9は坏身で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部内面に回転ナデ調整後ナデ調整、底部外面に回転ヘラ切り調整を施す。口縁部は内湾気味に伸びた後やや外傾し、端部を丸く仕上げている。かえりは内側に伸びた後上方に反り上がる。かえりの端部は尖り気味に仕

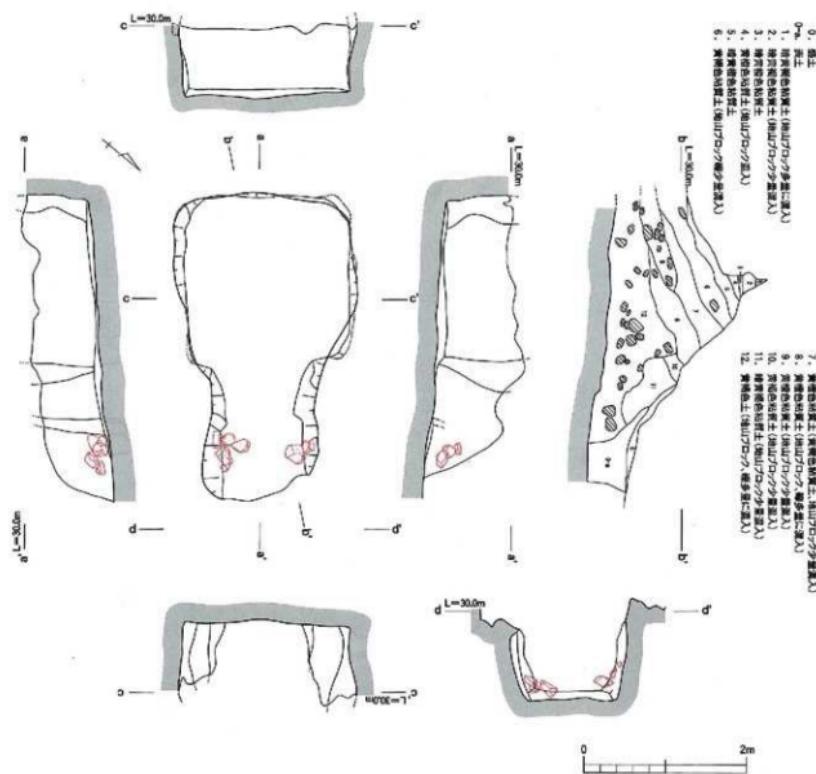


第13図 4号横穴墓出土遺物

上げている。10, 11は高台付坏である。10は口縁部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは内湾しながら立ち上がった後、端部を丸く仕上げている。11は器壁内外面に回転ナデ調整を施し、内面見込は回転ナデ調整後ナデ調整している。底部は高台を貼付して、回転ナデ調整している。高台見込にはナデ調整が残る。器壁の立ち上がりは内湾気味で、高台は外方に直線的に広がり、端部を丸く仕上げている。12は直口壺または短頸壺で、内外面ともに回転ナデ調整を施し、外面は体部中程から底部に回転ヘラケズリ調整を施している。13は砾石状の遺物であるが、使用痕は明確でない。

#### 5号横穴墓(第14, 15図)

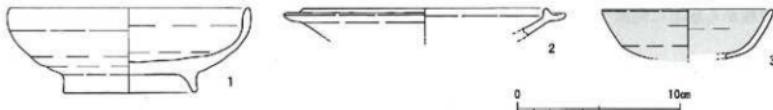
第14図は5号横穴墓で、玄室長2.02m、玄室幅2.05mのいびつな方形状を呈し、袖部は撫で型状と



第14図 5号穴 実測図

なっている。玄門は玄室側で幅1.25m、墓道側で幅0.81mを測り、墓道は最大幅1.01m、長さ1.07m以上を測る。墓道玄門側には閉塞石が残存していた。天井形態はドーム型かアーチ型と考えられる。遺物は墓道から須恵器、赤彩土器が出土している。

第15図は5号横穴墓の出土遺物で、1、2は須恵器である。1は高台付壺で、口縁部内外面とともに回転ナデ調整を施し、内面見込に回転ナデ調整後ナデ調整、底部は高台を貼付し、回転ナデ調整及び

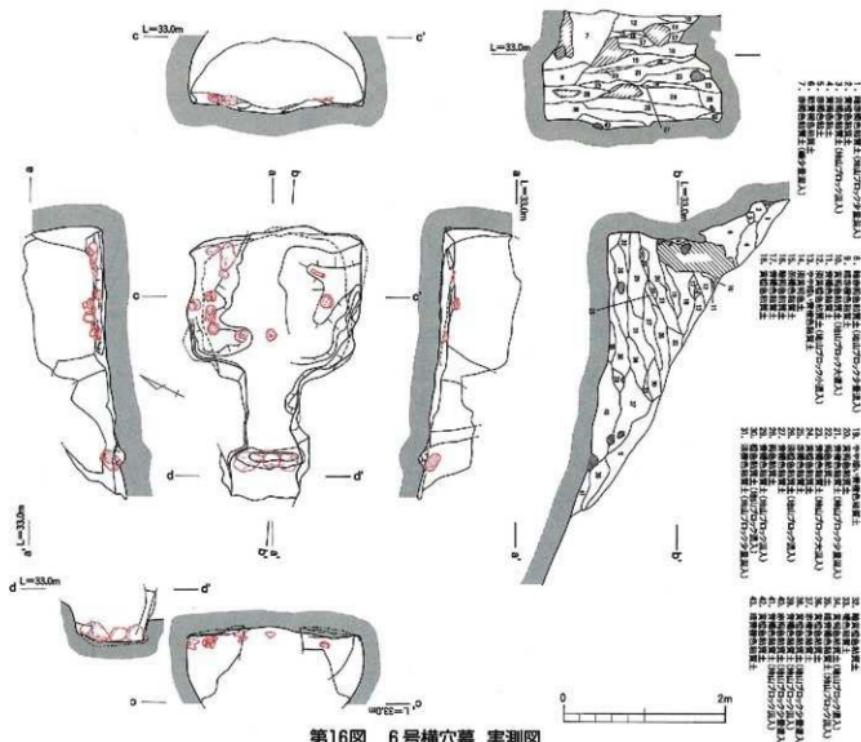


第15図 5号横穴墓出土遺物

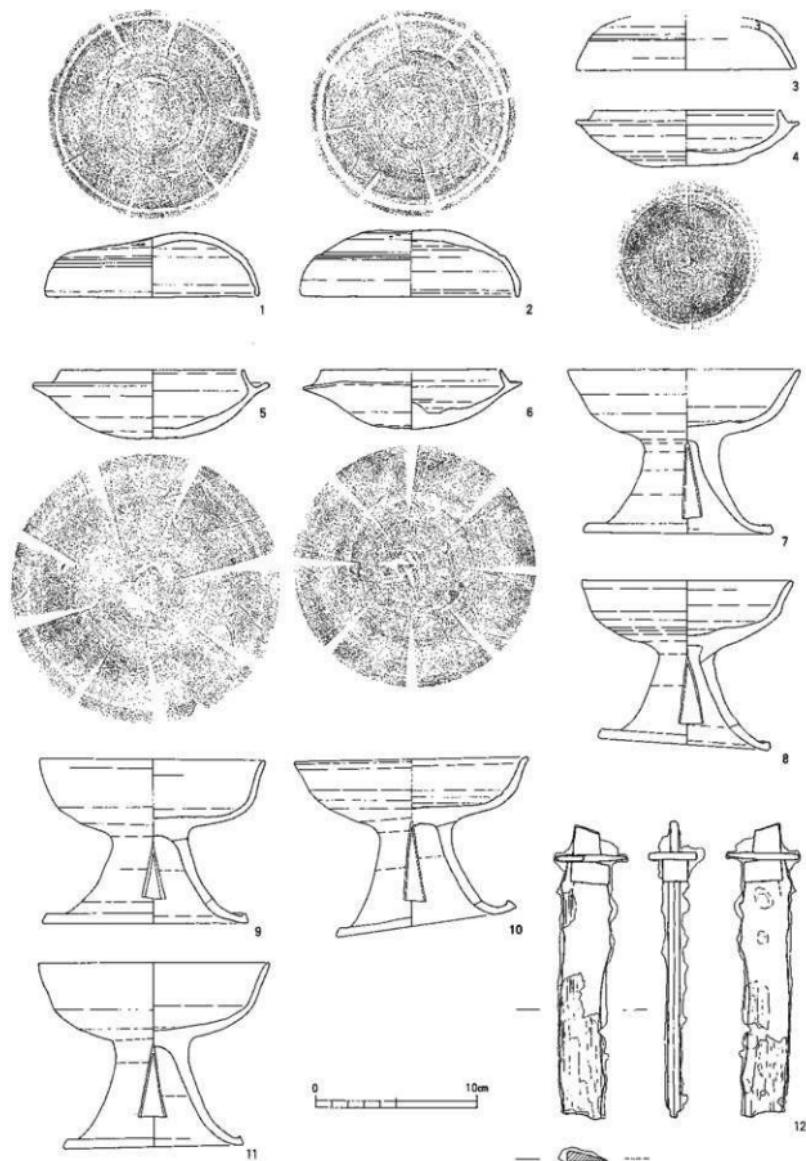
ナデ調整を施している。高台は外方に直線的に広がり、端部を丸く仕上げている。一方、口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。2は壊身で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。口縁部は外方に直線的に立ち上がった後外傾し内湾気味となる。端部は丸く仕上げている。かえりは短くやや内側に立ち上がる。端部は尖り気味に仕上げている。3は赤彩土器坏で、口縁部内外面に回転ナデ調整、内面見込み及び底部外面に回転ナデ調整後ナデ調整を施す。口縁部の立ち上がりは外方に直線的であるが、一部外反気味になるところもある。端部は尖り気味に仕上げている。内外面ともに赤彩を施している。

#### 6号横穴墓（第16、17図）

第16図は6号横穴墓で、玄室長1.88m、玄室幅2.14mの横長方形状を呈し、周囲に排水溝を施す。両側には死床を施していたものと考えられる。玄門は玄室側で幅0.70m、墓道側で幅0.62mを測り、墓道は最大幅0.89m、長さ0.67m以上を測る。墓道玄門側には閉塞石が残存していた。板などを置い



第16図 6号横穴墓 実測図



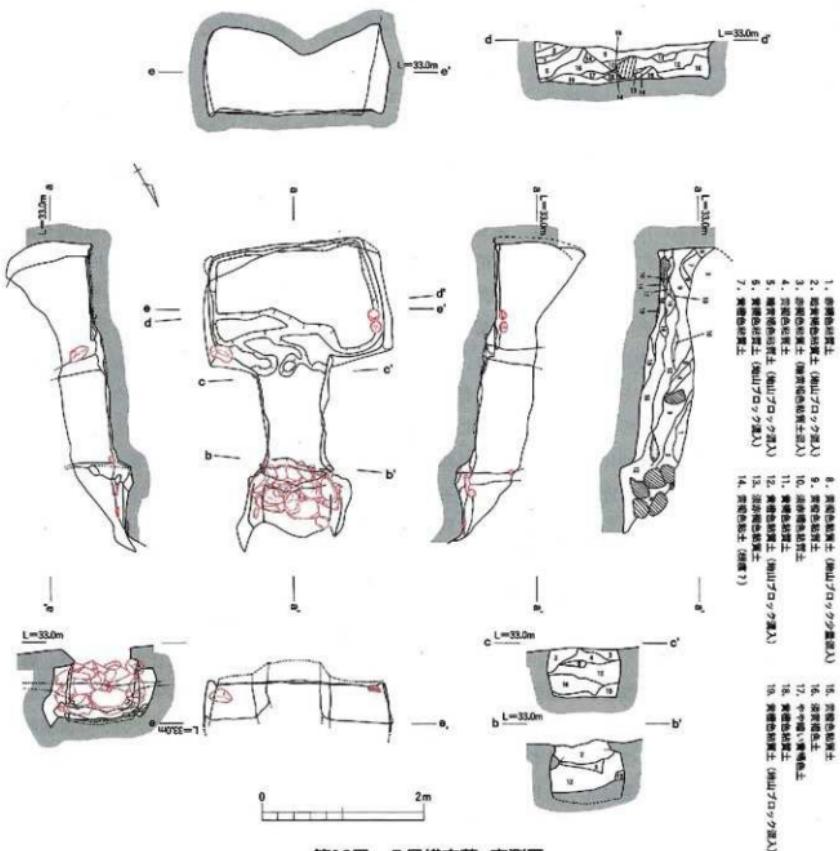
第17図 6号横穴墓出土遺物

た後石を詰めて閉塞したものと考えられる。天井形態はアーチ型と考えられる。遺物は須恵器、鉄刀が出土している。

第17図は6号横穴墓の出土遺物で、1～11は須恵器である。1～3は壺蓋で、口縁部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。天井部は内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、外面に回転ヘラケズリ調整が施されている。1、2は肩部は2条の沈線を施し稜を表現している。1は口縁部は天井部から内湾しながら伸び、端部内側やや上方に沈線を施す。端部は丸く仕上げている。2は天井部から内湾しながら伸び、端部内側に浅い沈線を施す。端部は尖り気味に仕上げている。3は肩部は1条の沈線を施し稜を表現している。口縁部は外方に直線的に広がり、端部は丸く仕上げている。内面に赤色顔料が付着している。4～6は壺身で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面見込には回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部外面は回転ヘラ切り調整を施すが、4はケズリの単位が比較的よく残っている。口縁部は4は内湾しながら立ち上がり、端部を外傾させて尖り気味に仕上げている。かえりは短く内側に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。5は内湾気味に立ち上がった後やや外傾し、端部を丸く仕上げている。かえりは内側に伸びた後上方にやや反り上がる。端部は尖り気味にしている。6は外方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。かえりは短く内側に立ち上がり、端部近くでやや反り上がる。端部は尖り気味にしている。7～11は高壺で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、内面見込に回転ナデ調整後ナデ調整を施す。一方、脚部は内面に回転ナデ調整を施し、内面見込にはナデ調整も施す。外面には回転ナデ調整が施される。2方向に三角透かしを施している。7は口縁部は外方に直線的に立ち上がり、やや外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。脚部は外反しながら広がり、端部は上端部をやや拡張させて平坦面を作っている。8は内面にカキ目状の痕跡が2条残る。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。脚部は外反しながら伸び、端部は上端部を拡張させて平坦面を作っている。9は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。脚部は外反気味に伸びた後、裾部でやや屈曲し、外方に直線的となる。端部は上端部を拡張させて平坦面を作っている。10は口縁部は外方に直線的に立ち上がった後、口唇部で外傾し、端部は丸く仕上げている。脚部は外反気味に伸びた後裾部で外反する。端部は両端部を拡張し平坦面を作っている。11は口縁部は外反気味に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げている。脚部は外方に直線的に広がった後外反する。端部は上端部を拡張させ平坦面を作っている。12は鉄刀で、茎及び刀身柄側の一部、切羽1点、鉗、鞘の木質が残存していた。

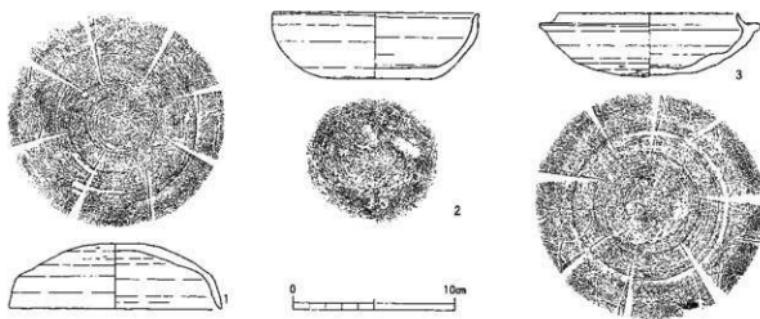
#### 7号横穴墓（第18、19図）

第18図は7号横穴墓で、玄室長1.58m、玄室幅2.15mの横長方形状を呈し、周間に排水溝を施す。玄門は玄室側で幅0.95m、墓道側で幅0.95mを測り、墓道は最大幅1.15m、長さ0.97m以上を測る。墓道玄門側には閉塞石が残存していた。板などを置いた後石を詰めて閉塞したものと考えられる。天井形態はテント型と考えられる。遺物は須恵器が出土している。



第18図 7号横穴墓 実測図

第19図は7号横穴墓の出土遺物で、1～3は須恵器蓋坏である。1は坏蓋で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。天井部内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、天井部外面には丁寧な回転ヘラケズリ調整が施されている。口縁部は天井部から内湾気味に伸びた後、器壁中程で屈曲し、やや外方に直線的に伸びる。口縁部端部内側や上方には沈線状の痕跡が残り、端部は尖り気味に仕上げている。2は坏で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施す。内面見込に回転ナデ調整後ナデ調整を施し、底部は風化が著しいが回転ヘラケズリ調整を施しているものと考えられる。口縁部は内湾気味に立ち上がりた後、口唇部で屈曲し外反気味となる。端部は尖らせている。3は坏身で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、内面見込に回転ナデ調整後ナデ調整、底部外面に丁寧なヘラ切り調整を施す。口縁部は内湾しながら立ち上がり外傾する。端部は丸く仕上げている。かえりは内側に立ち上がり、上方に反り上がる。端部は尖らせている。



第19図 7号横穴墓出土遺物

#### 8号横穴墓(第20図)

第20図は8号横穴墓で、玄室長1.76m、玄室幅1.98mの方形状を呈す。玄門は玄室側で幅1.35mを測る。玄門墓道側に加工が施されており、何らかの閉塞施設があったものと考えられる。天井形態はアーチ型と考えられる。遺物は出土しなかった。

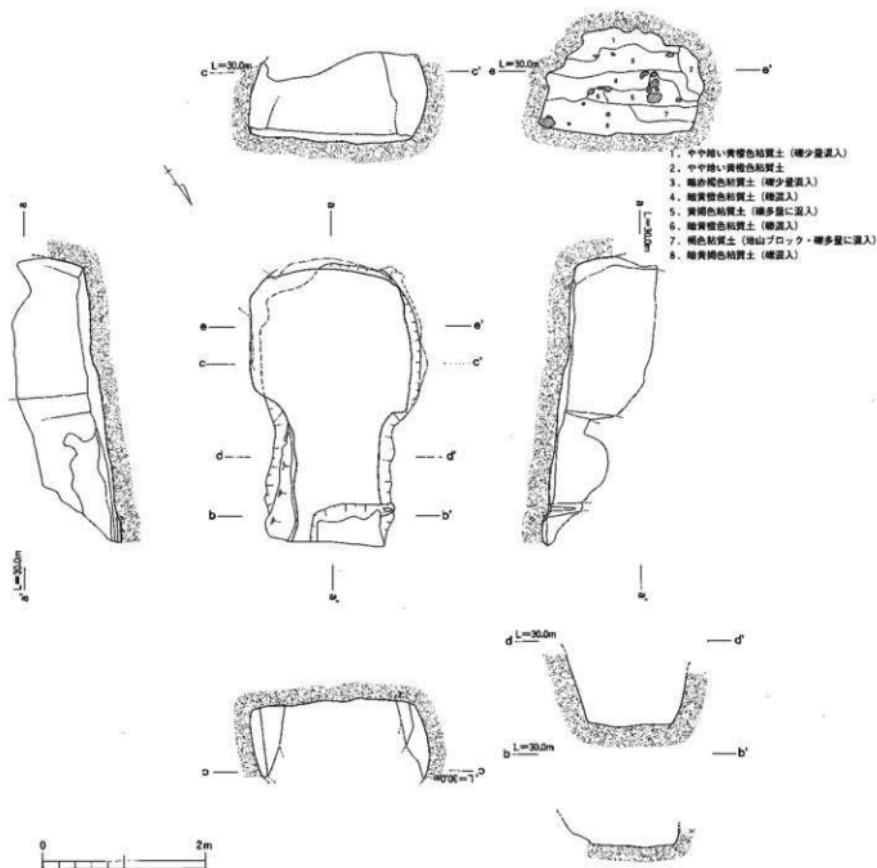
#### 9号横穴墓(第21図)

第21図は9号横穴墓で、全長3.58m以上、玄室幅0.79mを測り、無袖の縦長隧道状を呈す。正面右側には死床状の高まりが残され、奥壁に小横穴が掘削されている。前面を転石で閉塞しており、横穴墓として使用しているものと考えられる。天井形態はアーチ型である。遺物は出土しなかった。

#### 10号横穴墓(第22、23図)

第22図は10号横穴墓で、玄室長1.93m、玄室幅1.32mのやや縦長の方形状を呈す。玄門は玄室側で幅0.67m、墓道側で幅0.66mを測り、墓道は最大幅0.90m、長さ1.17m以上を測る。玄門墓道側には溝が残り、板などを置いて閉塞したものと考えられる。一方、玄門玄室側正面右袖に切り込みがあり、二重の閉塞をしていた可能性も考えられる。天井形態はアーチ型と考えられる。遺物は墓道から須恵器が出土している。

第23図は10号横穴墓墓道の出土遺物で、1～4は須恵器である。1、2は壺の底部で、器壁内外面ともに回転ナデ調整を施し、内面見込には回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部外面には回転糸切痕が残る。器壁は1は外方に直線的で、2は内湾気味に立ち上がる。3は高台付壺で、口縁部内外面と

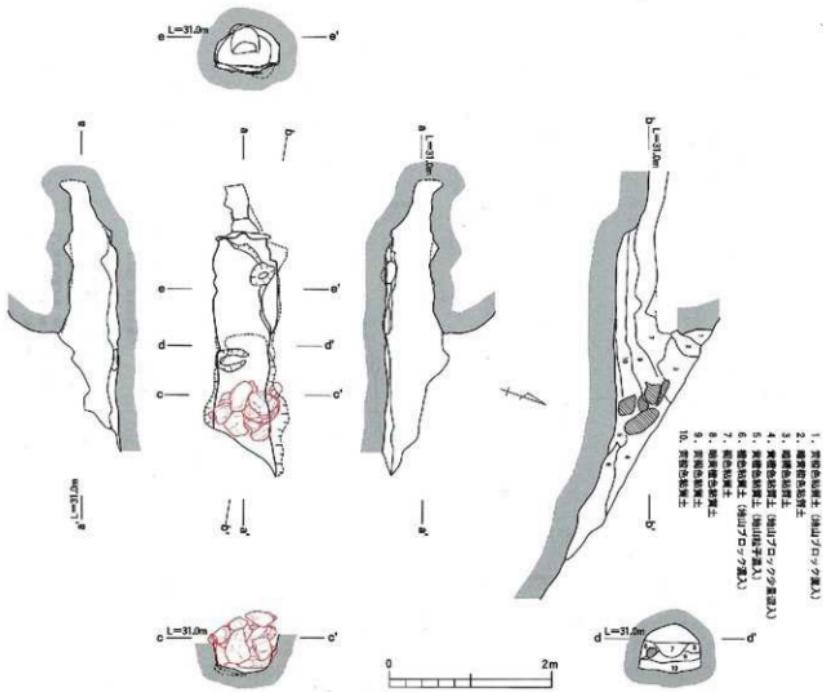


第20図 8号横穴墓 実測図

もに回転ナデ調整を施し、内面見込は回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部は回転ヘラケズリ調整後、高台を貼付してナデ調整を施している。口縁部は内湾気味に立ち上がった後、外方に直線的に立ち上がり、端部は丸く仕上げている。高台は外方に直線的に伸び、端部を丸く仕上げている。4は蓋で、内外面ともに回転ナデ調整を施す。外面にはヘラ記号が残る。口縁部は天井部から内湾気味に伸び、かえりは低く尖らせている。

#### 1号小横穴(第24図)

第24図は1号小横穴で、縦長3.24m、横幅0.78m、高さ1.34mの隧道状遺構である。壁面には工具



第21図 9号横穴墓 実測図

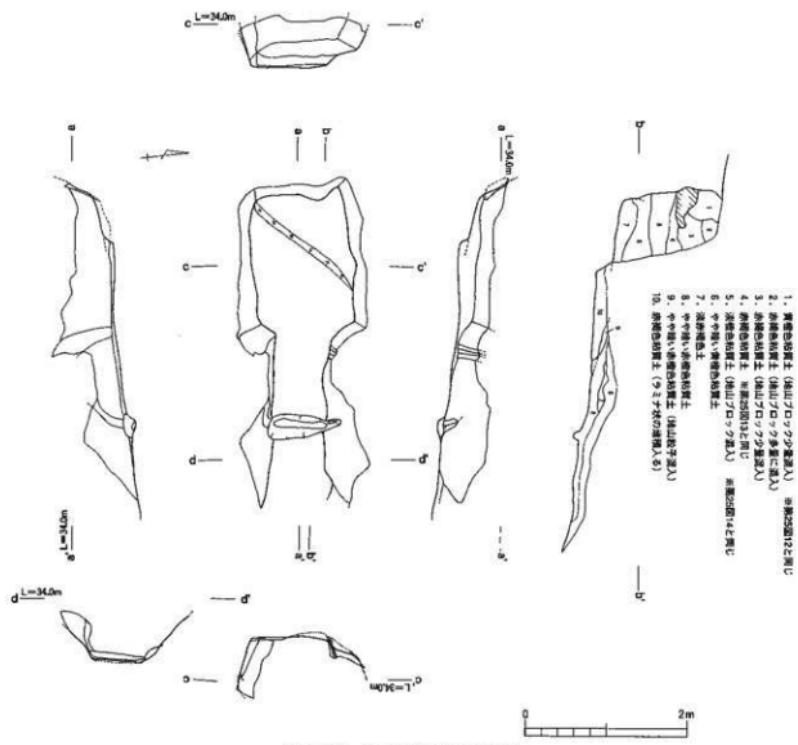
痕が残る。入口から奥約2.0mのところで奥壁を作り、奥壁上部と側壁、奥壁と天井部、天井部と側壁の一部の界線は明確である。また奥壁から小横穴が掘削されている。

#### S X 0 1 (第25、28図)

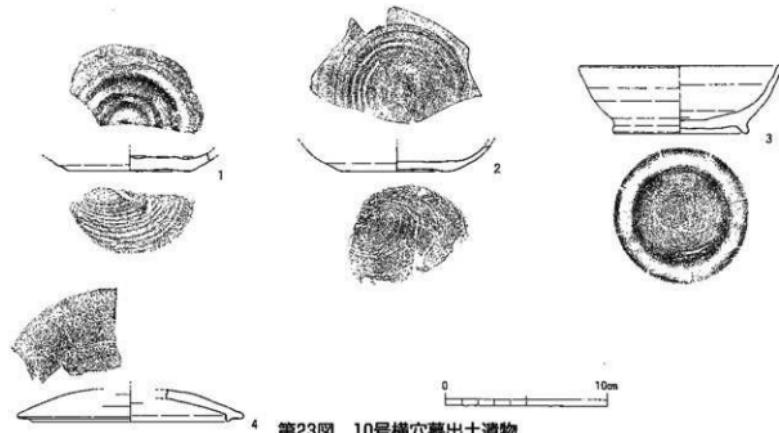
第25図は縦長約4.0m、横幅約4.6mの加工段状造構で、横穴墓が崩壊した可能性や祭祀場の可能性も考えられるが、遺物が出土しておらず詳細は不明である。なお、この造構の奥壁に1号小横穴が掘削されている。

#### S X 0 2 (28図)

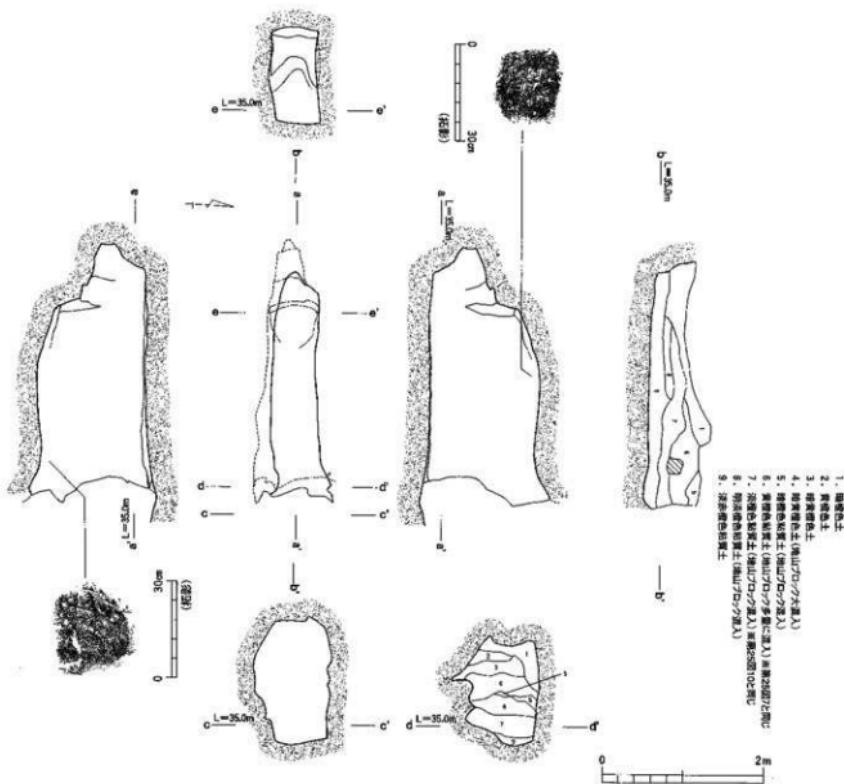
第28図は縦長約2.1m、横幅約3.2mの加工段状造構で、横穴墓が崩壊した可能性や祭祀場の可能性も考えられるが、遺物が出土しておらず詳細は不明である。



第22図 10号横穴墓 実測図



第23図 10号横穴墓出土遺物



第24図 1号小横穴 実測図

#### S X 0 3 (第26図)

第26図は縦長約1.7m、横幅約2.2mの加工段状遺構で、横穴墓が崩壊した可能性や祭祀場の可能性も考えられるが、遺物が出土しておらず詳細は不明である。

#### その他の遺物(第27図)

第27図はその他の遺物で、1～5は須恵器である。1は壺蓋で、口縁部内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施す。天井部外面は回転ヘラケズリを施した後、ナデ調整をしている。口縁部は天井部から内湾しながら伸び、端部を丸く仕上げている。肩部外面に1条の弦線が施されている。2は壺身で、口縁部内外面に回転ナデ調整を施し、内面見込には回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部外面には回転ヘラ切り調整が施されている。口縁部は外方に直線的に立ち上がりやや外傾する。端部は丸く仕上げている。かえりは短く内側に直線的に立ち上がる。かえり

の端部は丸く仕上げて

いる。3は直口壺で、

内外面ともに回転ナデ

調整を施すが、底部外

面にはナデ調整を施し

ている。口縁部はやや

外方に直線的に立ち上

がり、端部は尖り気味

に仕上げている。5号

横穴墓及び8号横穴墓

の前方で確認されてお

り、どちらかの横穴墓

の遺物である可能性も

ある。4は高坏で、器

部は口縁部内外面に回

転ナデ調整を施す。脚

部は2段2方向の透か

しがあり、上段は切れ

目、下段は三角透かし

となっている。また上

下2段の透かしの間に

は1条の沈線が施され

ている。口縁部は外方

に直線的に立ち上がり、

端部を尖り気味にして

いる。一方、脚部は外

方に直線的に広がった

後、裾部で外方に屈曲

する。5は口縁部で、

内外面ともに回転ナデ

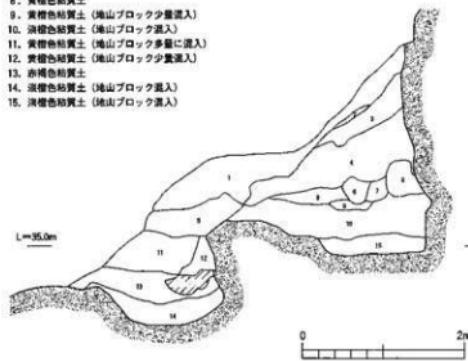
調整を施す。口縁部の

立ち上がりは外反しな

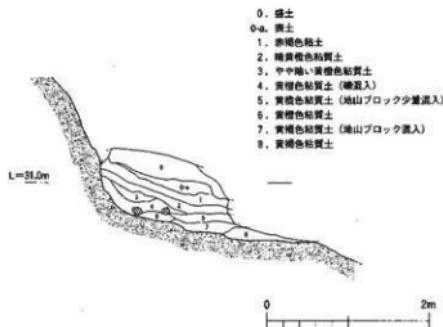
がら立ち上がり、端部

は丸く仕上げている。

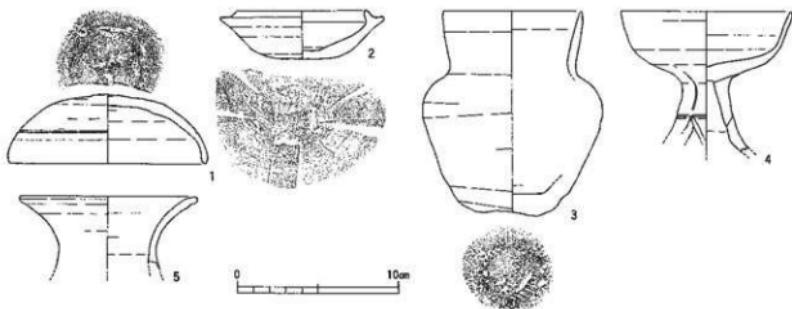
1. 鮎黄褐色粘質土
2. 黄褐色粘質土
3. 黄褐色粘質土
4. 黄褐色粘質土 (地山ブロック混入)
5. やや暗い淡褐色粘質土 (地山ブロック混入)
6. 淡褐色粘質土 (地山ブロック多量に混入)
7. 黄褐色粘質土 (地山ブロック多量に混入)
8. 黄褐色粘質土
9. 黄褐色粘質土 (地山ブロック少量混入)
10. 淡褐色粘質土 (地山ブロック少量混入)
11. 黄褐色粘質土 (地山ブロック多量混入)
12. 黄褐色粘質土 (地山ブロック少量混入)
13. 赤褐色粘質土
14. 淡褐色粘質土 (地山ブロック混入)
15. 淡褐色粘質土 (地山ブロック混入)



第25図 SX01土層堆積状況



第26図 SX03土層堆積状況



第27図 その他の出土遺物

## 第4章 考察

### 第1節 横穴墓について

西谷横穴墓群第2支群は、崩落が激しい脆弱な岩盤に造墓されており、東向斜面北側に密集して造墓された8穴(a群)と、東向斜面南側に所在し当支群の中でも取り分け脆弱な岩盤に造墓された2穴(b群)により構成されている(なお、調査区外北側に残る防空壕の踏査から、丘陵の北側ほど岩盤が安定することが確認されている)。これらの横穴墓群は脆弱な岩盤に掘削されたが故に天井部が落盤し、多量の土砂が堆積したことで、結果的に多くの副葬品を盗掘から保護することとなった。従って、副葬品などから造構の時期を類推することが可能である。

遺物が出土した横穴墓で最も古い様相を持つ遺物が出土したのは、4号横穴墓(ドーム型)と7号横穴墓(テント型)で、初葬は大谷見二氏の編年<sup>(注1)</sup>の出雲3期末に遡る可能性がある。

出雲4期になると、1号横穴墓(ドーム型またはアーチ型)、2号横穴墓(アーチ型)、6号横穴墓(アーチ型)が造墓され、当支群の造墓がピークとなる。このうち6号横穴墓には出雲5期の遺物も含まれており、出雲5期には追葬が初められた可能性がある。

出雲6期になると5号横穴墓(ドーム型またはアーチ型)に続き10号横穴墓(アーチ型)が利用される。これらの横穴墓の出土遺物は全て墓道からの出土で、玄室内にあったであろう遺物は盗掘されたと推定される。また同じ頃4号横穴墓では追葬が行われた。追葬期の出土遺物に隔離期は見られないが、出土遺物に若干時期幅があり、連続的に複数回の追葬が行われた可能性を考えられる。5号横穴墓は出雲7期の隔離期を挟んで出雲8期の遺物が出土する。盗掘を受けていたため、出雲6期の出土遺物を初葬と考えるか、追葬と考えるか検討の余地はあるが、①盗掘はされているものの、a群の初葬時に併行する遺物が出土していないこと、②出雲4期において造墓するスペースを与えないほどa群に横穴墓が造墓されたこと、③b群が当横穴墓群の中でも取り分け脆弱な南側の岩盤に掘削されていることなどから、5号横穴墓が掘削された時期にはa群周辺に横穴墓を造墓するスペースはほとんどなかったものと考えられ、a群の大多数の横穴墓より新しい可能性が高い。なお、出雲8期の出土遺物は追葬時の副葬品と考えられる。10号横穴墓は連続的に出雲6期から出雲8期までの遺物が出土しており、出土遺物に時期幅が見られる。10号横穴墓も盗掘を受けていたため、出雲6期の出土遺物を初葬と考えるか、追葬と考えるか検討の余地があるものの、出土遺物の時期幅から追葬は行っているものと考えられる。

3号横穴墓(アーチ型)・8号横穴墓(アーチ型)・9号横穴墓(アーチ型)は盗掘などにより遺物は出

土していないが、3号横穴墓の墓道が4号横穴墓の天井部を破壊していることと、3号横穴墓の墓道から10号横穴墓が掘削されていることから、4号横穴墓→3号横穴墓→10号横穴墓の新旧関係が確認できる。

また初葬時期を類推できる1号横穴墓・2号横穴墓・4号横穴墓・6号横穴墓・7号横穴墓のデータを主眼とし、盗掘を受けたことにより初葬時に検討の余地がある5号横穴墓・10号横穴墓のデータを補助的なデータとして天井形態との関係を検討してみることとする。この横穴墓群の中ではドーム型・テント型がそれぞれ別系統として先行して造墓され、出雲4期にはアーチ型も造墓されるようになる。この頃造墓はピークを迎え、ドーム型・テント型・アーチ型が並存することとなる。異なる天井形態の横穴墓が同時期の狭いエリアに混在・密集して造墓されることで、天井形態の特徴が融合された可能性も考えられる。6号横穴墓はアーチ型であるが、平面プランはテント型の7号横穴墓に近い。追葬が始まる出雲5期または出雲6期には、a群周辺は横穴墓が密集していたと考えられる。一方、南側に小支群的に造墓されているb群の2穴(5号横穴墓、8号横穴墓)は平面プランが大きく、かつ平面プランの形状も類似している。b群2穴は形状から同時期のものと考えられ、先の5号横穴墓①~③の理由からa群の大多数の横穴墓より新しい可能性が高い。またa群の横穴墓との類似点は少ない。従って、b群の造墓に関してはa群の特徴を取り入れた可能性は低く、当横穴墓群の中でも独自的な発達をしたものと考えられる。

西谷横穴墓群第2支群消長表

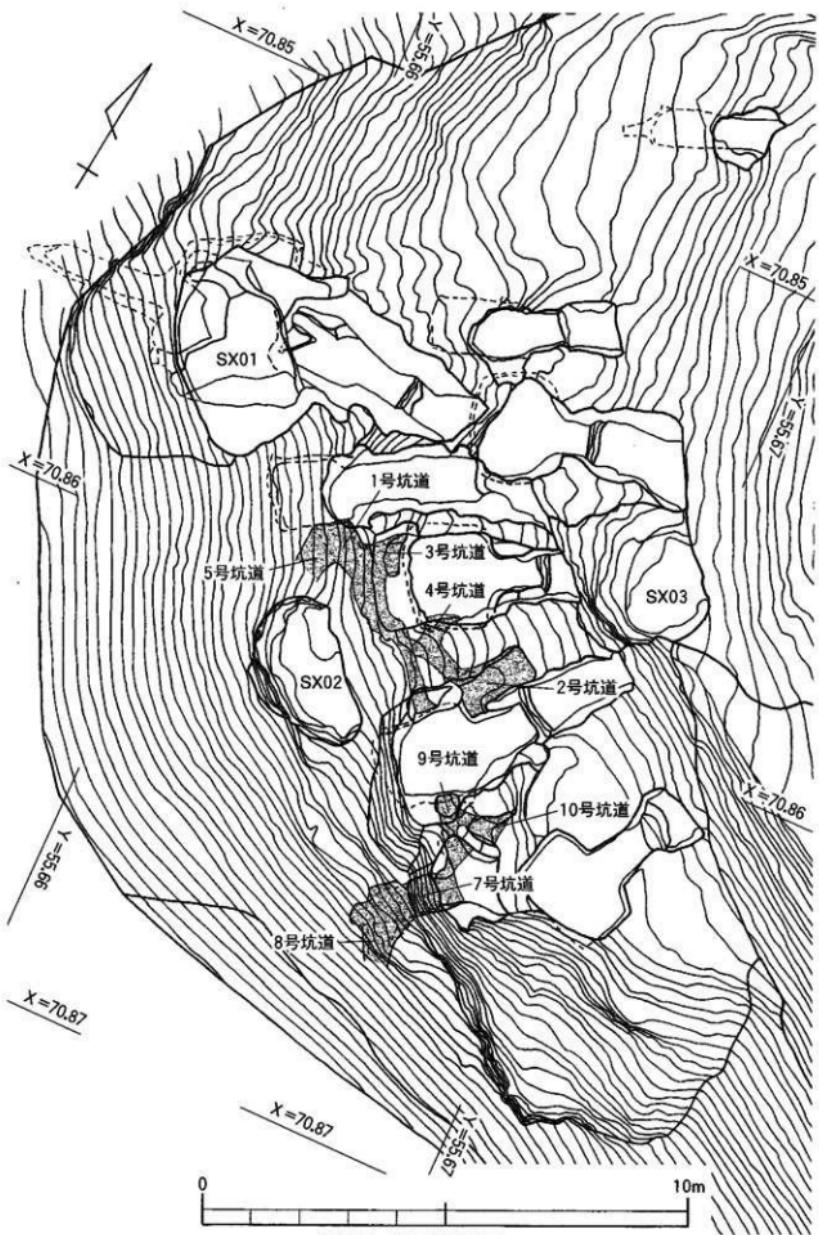
	1号穴	2号穴	3号穴	4号穴	5号穴	6号穴	7号穴	8号穴	9号穴	10号穴
出雲3期										
出雲4期										
出雲5期										
出雲6期	A									
	B									
出雲7期										
出雲8期										
天井形態	ドーム or アーチ	アーチ	アーチ	ドーム	ドーム or アーチ	アーチ	テント	アーチ	アーチ	アーチ

## 第2節 横穴墓の立地と閉塞石について

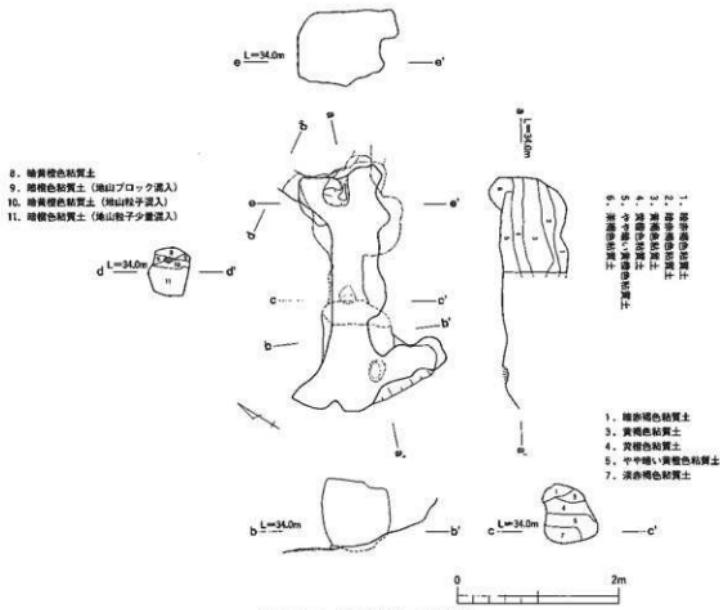
西谷横穴墓第2支群は、丘陵の東側斜面に所在し、丘陵上には四隅突出型墳丘墓が続く。また当横穴墓群の大部分を占めるa群は西谷2号墓の下に位置している。

墳丘の大部分が削平されている2号墓は、調査により下部構造の残存が確認されているが、東側突出部については既に斜面下に崩落しているものと考えられている<sup>(注2)</sup>。

一方、a群が所在する斜面は裾部で規則的な半円形を呈しており、横穴墓掘削前に斜面を加工している可能性も考えられるが、近代に横穴墓群下の萬祥山窯がこの丘陵で多量の粘土採取を行っており<sup>(注3)</sup>、斜面の加工については今後検討の余地がある。また横穴墓の閉塞石に使用されている石材は、当横穴墓群南方の三谷付近に分布する火山岩類と同質であり、四隅突出型墳丘墓の貼石にも同質の石材が使用されている<sup>(注4)</sup>。閉塞石の石材は付近から調達したものである可能性が高いが、横穴墓掘削時に既に突出部が崩落していれば、最も簡単に閉塞石の石入手する方法は、斜面下に崩落していたであろう貼石を転用する方法であり、当横穴墓群に使用されている閉塞石は、丘陵上に所在する四隅突出型墳丘墓の貼石を転用したものである可能性がある。



第28図 盜掘坑位置図



第29図 7号坑道 実測図

### 第3節 盗掘坑について

西谷横穴墓群第2支群では多数の盗掘坑が確認されている(第28図)。盗掘の坑道からは遺物が出土していないため詳細は不明である。脆弱な地盤に掘削されており、盗掘は短期間に行われたものと考えられるが、一部の坑道からは新旧関係を推察することができる。

この横穴墓群では3号横穴墓玄室正面右側上方から1号横穴墓に向かって掘削された坑道(1号坑道)が盗掘坑の本線となっている。1号坑道は3号横穴墓側で坑道幅が106cm、1号横穴墓側で坑道幅が30cmあり、この盗掘坑により1号横穴墓まで人が侵入することは不可能であるが、空間や土層堆積の変化に当たることができれば、最後まで侵入しなくとも道具で“アタリ”を付けることは可能であったと考えられる。またこの1号坑道を本道として枝分かれ状に盗掘を試みている。5号坑道は1号坑道から枝分かれして掘削した坑道で、入口付近で幅70cmを測り、3号横穴墓玄室近くで丘陵方向に枝分かれしている。しかし地盤が脆弱で危険が伴ったため、調査することはできなかった。3号坑道は5号坑道より25cm先で斜面方向に掘削している。6号横穴墓の埋土を切っていることから、6号横穴墓天井崩落後に掘削されたものと考えられる。

一方、1号横穴墓玄室正面右袖付近でも盗掘坑(2号坑道)が確認されている。2号坑道は坑道幅が約80cm程度あり、人の侵入が可能である。またより副葬品に近いところから掘削し始めている。なお、1号横穴墓は土層堆積から盗掘時には既に天井部は落盤していたものと考えられる。2号坑道は副葬品の上を通過しているため、盗掘時に遺物を発見できなかつたか、落盤などの理由により盗掘を断念したのであろう。また2号坑道には6号横穴墓方向へ枝分かれした坑道(4号坑道)がある。4号坑道

は最大幅約40cmを測り、約80cm奥で6号横穴墓方向へ右90°屈曲し、6号横穴墓床面まで傾斜する。屈曲点が1号坑道を避けていることから、4号坑道は1号坑道より新しい。人が通り抜けることは不可能と考えられるが、屈曲部までは侵入可能である。6号横穴墓が未盗掘であることから、3号坑道と4号坑道は6号横穴墓に対しての試掘的な坑道と考えられ、4号坑道で6号横穴墓の床面を確認していることから、天井落盤の埋土で作業効率の悪いこの横穴墓の盗掘を踏めたものと考えられる。

このほか崩落の危険から調査できなかった8号横穴墓正面左側奥角の坑道(6号坑道)、7号横穴墓上方に掘削された坑道(7号坑道)を中心とする坑道群がある。7号坑道(第29図)の入口は手前のレベルが高くなることから、3号横穴墓に見られるように横穴墓内から盗掘坑を掘削したのではなく、斜面上方から掘削したものと考えられた。7号坑道は、縦長3.02m以上、横幅0.6~0.7m、高さは入口付近で約0.8mの坑道で、正面左奥方向に枝状に坑道(8号坑道)が掘削されている。8号坑道は崩落の危険があつたため完掘できなかつた。

一方、7号坑道入口正面右側にも1号横穴墓に続く坑道(9、10号坑道)が掘削されている。なお、10号坑道は9号坑道に合流している。これらの坑道はそれぞれ幅約30cmで、人の侵入は容易ではない。土層堆積から1号横穴墓の天井部は既に落盤しており、早い段階で盗掘を断念したものと考えられる。

坑道の新旧関係はやや離れたところにある6号坑道については不明である。しかし7~10号坑道については、坑道の枝別れの状態から7号坑道→8号坑道、9号坑道→10号坑道が考えられる。一方、1~5号坑道については、枝分かれの状況から2号坑道→4号坑道、1号坑道→3号坑道・5号坑道、優先関係から1号坑道→4号坑道と考えられる。また横穴墓間を横に掘削する1号坑道と横穴墓1穴を狙い縦に掘削する2号坑道の目的を考えた場合、1号坑道で“アタリ”を付け、2号坑道で本格的に盗掘する方が作業効率が良く、逆説的に2号坑道→1号坑道と考えた場合、1号坑道の“アタリ”は全く目的のない掘削となる。大正から昭和初期にかけて書かれた安来周辺の盗掘日誌『八雲漫遊日誌<sup>(註1)</sup>』には、大正七年三月廿八日の条に、「失敗ニ失敗ヲ重ネタルニ付…(中略)…古塚中ノ石棺ヲ探ル鉄製ノ針ヲ造リ古塚上ヨリ其針ヲ以テ石棺有無ヲシカメタル事…」とあり、盗掘の方法として状況に応じ試掘的作業も行っていたことが推察される。以上のことから、1号坑道の結果を踏まえ各論的に2号坑道を掘削したものと考えられ、1号坑道→2号坑道という新旧関係が推定できる。一方、3号坑道と4号坑道はそれぞれ6号横穴墓に対しての“アタリ”と“結論”に当たると考えられ、3号坑道→4号坑道という新旧関係が推定できる。

7~10号坑道と1~5号坑道の関係は今後検討の余地があるが、1号坑道と9号坑道は1号横穴墓に対しての“アタリ”に当たるものと考えられる。1~5号坑道の中で最も古い坑道は1号坑道で、この坑道は複数の横穴墓に“アタリ”を付けることが目的だったと考えられる。このデータに基づき各論的に盗掘が行われた。脆弱な地盤に掘削された横穴墓の盗掘を考えた場合、この方法が最も効率的であると考えられる。

(註1) 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会 1994

(註2) 板木豊治編『西谷墳墓群－平成14年～16年度発掘調査報告書－』 出雲市教育委員会 2006

(註3) 萬葉山窯 日野勤甫氏にご教示いただいた。

(註4) 島根県立三瓶自然館サミエル 指導員 中村唯史 氏にご教示いただいた。

(註5) 『八雲漫遊日誌』『松江考古』7号 松江考古学談話会 1989

## 第5章 小結

今回の調査により従来考えられていなかった脆弱な岩盤にも横穴墓が造墓されることが確認された。また脆弱な岩盤に造墓されたが故に多量の土砂で副葬品が盗掘から保護され、またテント型・ドーム型・アーチ型各種の横穴墓の時期が推定できることから、異なる天井形態を持つ横穴墓の併行関係を考える上でも貴重な資料になったと考える。

また横穴墓の閉塞石には丘陵上の四隅突出型墳丘墓の貼石と同質の石が使用されている。これらの石は当横穴墓群南方の三谷付近に分布する火山岩類と同質の石であるが、墳丘墓東側の突出部が崩落しており、横穴墓の閉塞石は墳丘墓の貼石を転用している可能性が考えられる。今後様々な角度から検討する必要がある。

一方、当横穴墓では脆弱な岩盤に密集して横穴墓が造墓されていることから、他の横穴墓に見られるような閉塞石上からの盗掘ではなく、横穴墓の壁を坑道状に掘削して“アタリ”を付ける方法が主体であった。

このような盗掘方法は軟質な岩盤に造墓された他の横穴墓でも確認されている。盗掘時に最も弊害となるものは閉塞石である。軟質な岩盤に横穴墓が密集している当支群の場合は、この方法が最も盗掘の作業効率が高かったのであろう。

## 第6章 自然科学分析

### 西谷横穴墓群第2支群2号横穴墓から出土した人骨について

鳥取大学医学部機能形態統御学講座形態解析学分野

川久保 善智・井上 貴央

#### 1. はじめに

島根県出雲市大津町の西谷丘陵には弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓をはじめ、数多くの墳墓が密集している。今回調査が行われた丘陵の北東側斜面からは少なくとも10基の横穴墓が検出され、その1つ(2号横穴墓)から人骨が発見された。この人骨に近接して出土した蓋壺と呼ばれる須恵器はその形式から6世紀後半のものと推定されている。人骨の保存状態は良好とは言えないが、脳頭蓋、下顎、右上腕骨などが残存していた。本稿ではこれらの人骨から得られた形態人類学的所見について報告する。

#### 2. 検出状況

人骨検出の直後に、筆者のうち川久保が現場に赴き、人骨や遺物の分布状況を確認し、取り上げを行った。図1に出土状況、図版2にそのステレオ写真を示す。玄室の天井は、墓道側のおよそ半分が崩落しており、人骨は玄室の中央よりやや奥の、天井が崩落していない場所から検出された。人骨や蓋壺は床面から少し浮いた状態で検出された(図版2参照)。

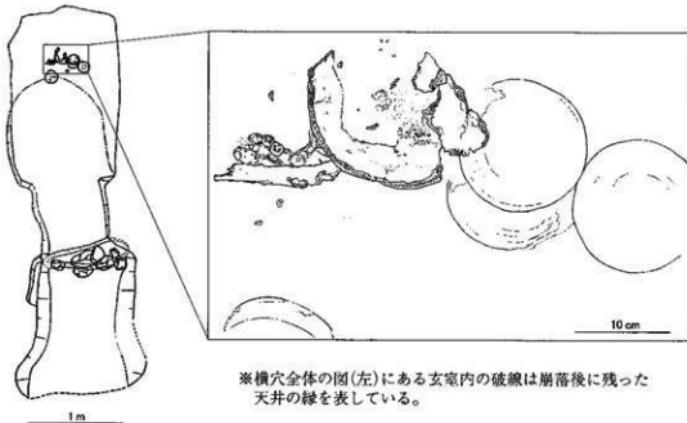


図1 2号横穴墓人骨の出土状況

### 3. 残存部位

頭蓋は、前頭骨、左頭頂骨、後頭骨、左側頭骨の一部が残存していた。後頭骨の保存状態は比較的良好で、インカ骨 Inca bone (後頭鱗のうち左右の頭頂骨に挟まれる部分が横後頭縫合によって隔てられて独立した骨)が認められた。そのほか、ラムダ縫合には多数のラムダ縫合骨 lambdoid ossicles がみられた。これらを含む頭蓋の非計測的形態小変異の観察結果を表1に示す。

下顎は歯と歯槽の一部が残存するのみであるが、歯の保存状態は良好で、右が中切歯～第3大臼歯まですべて揃っており、左も中切歯～第1小白歯と第1大臼歯が認められた。一方、上顎歯は1本も検出されなかった。歯式を以下に示す。

欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠	欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠 欠
M <sub>4</sub> M <sub>2</sub> M <sub>1</sub> P <sub>2</sub> P <sub>1</sub> C I <sub>2</sub> I <sub>1</sub>	I <sub>1</sub> I <sub>2</sub> C P <sub>1</sub> 欠 M <sub>1</sub> 欠 欠

四肢および体幹骨については、取り上げのときに同定できたものは右上腕骨の遠位側のみであったが、骨の取り上げの時やその前に人骨の周辺で採取された土の中から、脛骨と思われるものを含む小片が少量検出された。

表1. 頭蓋の非計測的形態小変異

	R	L
1. 前頭縫合	( / )	( / )
2. 眼窩上神經溝	( / )	( / )
3. 眼窩上孔	( / )	( / )
4. ラムダ小骨	( / )	( / )
5. ラムダ縫合骨	( / )	( + )
6. 横後頭縫合痕跡	( + )	( / )
7. アステリオン骨	( / )	( / )
8. 後頭乳突縫合骨	( / )	( / )
9. 頭頂切痕骨	( / )	( / )
10. 頸管開存	( / )	( / )
11. 前頸結節	( / )	( / )
12. 傍顎突起	( / )	( / )
13. 舌下神經管二分	( / )	( / )
14. フュケル孔	( / )	( + )
15. 頸卵孔形成不全	( / )	( / )
16. ヴェサリウス孔	( / )	( / )
17. 翼棘孔	( / )	( / )
18. 内側口蓋管	( / )	( / )
19. 口蓋隆起	( / )	( / )
20. 外耳道骨膜	( / )	( - )
21. 橫頸骨縫合痕跡	( / )	( / )
22. 頭靜脈孔二分	( / )	( / )
23. 矢状溝溝左折	( - )	( / )
24. 床狀突起間骨橋	( / )	( / )
25. 頸舌骨筋神經溝骨橋	( / )	( / )
26. 下顎隆起	( / )	( / )

±：有 -：無 ∕：欠損または不明

#### 4. 年齡推定

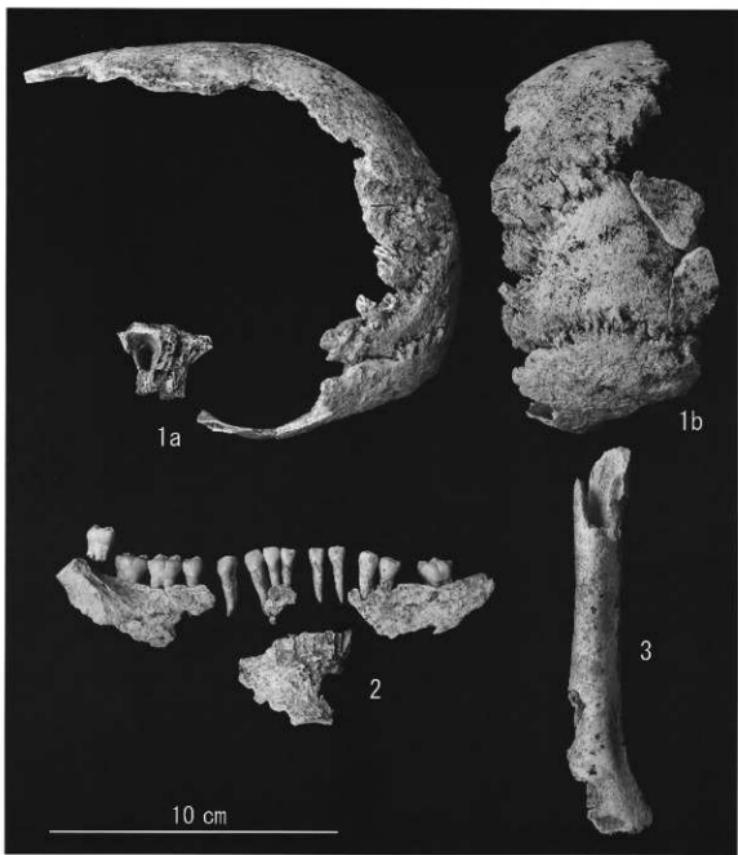
頭蓋冠に残る冠状縫合やラムダ縫合をみると、いずれもほとんど癒合していないことから、本人骨の年齢は未成年か、遅くとも壮年前半であった可能性が高い。歯の咬耗の程度は全体的に弱く、切歯～犬歯にかけては象牙質の露出が若干認められるものの、小白歯と大臼歯の咬耗は象牙質に達していなかった。歯根の形成は中切歯～第2大臼歯まで完了していたが、第3大臼歯では未完成であった。歯根の形成段階や咬耗の程度から判断すると、15～20歳程度と考えられる。

## 5. 性別判定

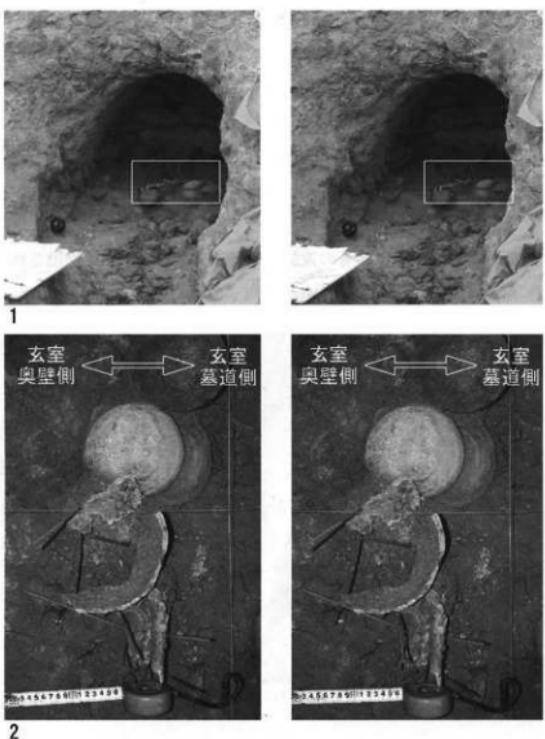
人骨の保存状態が悪いため正確な判定は難しいが、上腕骨は骨幹がやや細く、さらに位の内側縁の発達が弱いため、全体的に華奢であり、女性的な印象を与える。ただし、頭蓋冠や下顎と同じ個体であれば、まだ成長過程にあるため、男性のものである可能性も捨てきれない。

## 6. 考察

横穴墓では複数の個体が合葬されている場合が多いため、これらの骨や歯が必ずしも1つの個体に属するとは限らないが、頭蓋冠と下顎(歯)のそれぞれから推定される年齢はほぼ一致しており、同一の個体と見なしても矛盾はない。ただし、下顎歯がほとんど揃っていたにもかかわらず、上顎歯がまったく認められなかったことから、これらが交連状態になかった可能性がある。上顎の歯は上顎骨ごと別の位置に移動したか、または下顎や頭蓋冠がこの位置に移動したとき、他の場所に取り残された可能性が高い。下顎の歯はこの個体が比較的若かったことを示していることから、上顎の歯だけが生前に脱落したとは考え難い。また、右上腕骨の遠位側が下顎に接した状態で検出されている点も、これらの骨が交連状態になかった可能性を示している(図1, 図版2参照)。



図版1 1a: 脳頭蓋の左側面観, 1b: 脳頭蓋の後面観, 2: 下顎, 3: 右上腕骨



図版2 2号横穴墓人骨の出土状況を示すステレオ写真。1：2号横穴墓外観，2：2号横穴墓人骨と蓋環

## 7.まとめ

2号横穴墓から出土した人骨は1個体分である可能性が高いが、交連状態を保っておらず、白骨化した後に何らかの理由で動いたと考えられる。歯の萌出段階や咬耗の程度、頭蓋冠の縫合の癒合状態から年齢は10代後半であったと考えられる。性別については判定が難しいが、上腕骨が華奢なことから女性であった可能性がある。

## 出土遺物観察表（土器類）

建設番号	河川	出土地点	種別	基盤	口径	底径	高さ	手すりの特徴	備考
6-1	国版13	1号機穴室 玄室	赤彩土器	高环	13.5	10.7	12.3	内面：ナデ、ハロ 外面：ナデ、ハク目、ヘラミガキ	全表面に赤色迷彩
-2	国版13	1号機穴室 玄室	赤彩土器	高环	(14.5)	11.0	12.2	内面：ナデ、ハク目、ヘラケズリ 外面：ナデ、ハク目、ヘラミガキ	全表面に赤色迷彩
-3	国版13	1号機穴室 玄室	赤彩土器	短底壺	7.8	-	7.1	内面：ナデ 外面：ナデ、ハク目	口部内外面及び底部外面に赤色迷彩
-4	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	短底壺	8.1	-	6.6	内面：ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ、無いナデ	側面部内に3条のヘラ状工具痕
-5	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.6	-	3.9	内面：回転ナゲ、回転ヘラ	側面部内に2条の花瓶形後縁表現
-6	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.7	-	3.9	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	側面部内に2条の花瓶形後縁表現
-7	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.8	-	3.7	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	側面部内に2条の花瓶形後縁表現
-8	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.7	-	3.6	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	側面部内に2条の花瓶形後縁表現
-9	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.7	-	3.5	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	前部外面の2条の沈縫で後縁表現 火井井戸外面に赤色磨削による「ノ」記号
-10	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	12.2	-	3.9	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
-11	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.4	-	3.8	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り、ナデ	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
-12	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.8	-	3.5	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り、ナデ	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
7-1	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.8	-	3.6	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り、ナデ	内面：回転ナゲ、ナデ
-2	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.6	-	3.8	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り、ナデ	外側に自然種付帯
-3	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	12.6	-	3.8	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
-4	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	12.0	-	3.7	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
-5	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	12.8	-	3.7	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り	内面：回転ナゲ、ナデ
-6	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	(11.6)	5.4	14.6	内面：回転ナゲ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ、波状文	波状文上方に2条の沈縫 体部の2条の辺縫の間に斜文文 1方向に波状
-7	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	环底	(12.0)	4.4	12.9	内面：回転ナゲ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ、波状文	波状文下方に1条の沈縫 体部の2条の辺縫の間に斜文文 1方向に空泡
-8	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	壳	-	-	-	内面：青海波文 外面：青海波文	内面：青海波文
8-1	国版13	1号機穴室 玄室	領忠器	横版	-	-	-	内面：青海波文 外面：平行タケ	体部側面の一方に斜土板の接合 痕あり。
10-1	国版14	2号機穴室 玄室	領忠器	环底	12.1	-	4.1	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	局部外面に1条の横
-2	国版14	2号機穴室 玄室	領忠器	环底	12.3	-	3.9	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	局部外面に1条の横
-3	国版14	2号機穴室 玄室	領忠器	环底	12.2	-	4.2	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り、ナデ	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
-4	国版14	2号機穴室 玄室	領忠器	环底	11.6	-	4.1	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
13-1	国版14	4号機穴室 玄室2層	領忠器	盖	9.6	-	3.2	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り、ナデ	内面：回転ナゲ、回転ヘラ切り
-2	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	环底	(9.6)	-	3.1	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	内面：回転ナゲ、ナデ
-3	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	环底	-	-	-	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り	前部外面の1条の沈縫で縁を表現
-4	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	壳	-	-	-	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	縫み欠損
-5	国版14	4号機穴室 玄室2層	領忠器	壳	(12.3)	-	-	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ	縫み欠損
-6	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	盖	(11.2)	-	-	内面：回転ナゲ 外面：回転ナゲ	内面：回転ナゲ
7	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	盖	-	-	-	内面：回転ナゲ 外面：回転ナゲ	内面：回転ナゲ
-8	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	环	-	-	-	内面：回転ナゲ 外面：回転ナゲ	内面：回転ナゲ
-9	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	环身	13.2	-	4.0	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ切り	内面：回転ナゲ、ナデ
-10	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	高台付环	(14.9)	-	-	内面：回転ナゲ 外面：回転ナゲ	高台欠損
-11	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	高台付环	-	7.2	-	内面：回転ナゲ、ナデ 外面：回転ナゲ、ナデ	高台付
-12	国版14	4号機穴室 玄室	領忠器	短底壺	-	-	-	内面：回転ナゲ 外面：回転ナゲ、回転ヘラ	内面：回転ナゲ

捲回番号	写真	出土地点	種 別	器種	寸法	底径	脚合	手括の特徴	備 考
15-1	図版15	5号後火葬 墓道	須恵器	高台付环	(14.6)	8.1	5.2	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、ナデ	高台付环
-2	図版15	5号後火葬 墓道	須恵器	环身	(16.0)	-	-	内面：圓軸ナデ 外周：圓軸ナデ	外周に自然脚付环
-3	図版15	5号後火葬 墓道	須恵器	环	10.3	-	-	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、ナデ	全面に赤色繪彩
17-1	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	环蓋	13.0	-	4.0	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ	前部外側の2条の注溝で腰を表現 口部周縁内側や上方に1条の波紋
-2	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	环蓋	13.3	-	4.1	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ	前部外側の2条の注溝で腰を表現 口部周縁内側に浅い1条の波紋
-3	図版15	6号横穴墓 墓道	須恵器	环蓋	(13.5)	-	-	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ	前部外側の1条の注溝で腰を表現 内面に赤色繪彩付
-4	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	环身	12.8	-	3.5	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ切り	内面：圓軸ナデ、ナデ
-5	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	环身	12.6	-	4.3	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ切り	内面：圓軸ナデ、ナデ
-6	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	环身	12.4	-	3.7	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ切り	内面：圓軸ナデ、ナデ
-7	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	高环	14.3	11.6	10.1	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ	2方向に三角透かし
-8	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	高环	12.9	10.6	10.1	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ	2方向に三角透かし 内面にV字形切の虚線2条が残る
-9	図版15	6号横穴墓 支室	須恵器	高环	13.9	12.6	10.1	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ	2方向に三角透かし
10	図版15	6号後火葬 支室	須恵器	高环	14.3	11.2	10.3	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ	2方向に三角透かし
-11	図版15	6号後火葬 支室	須恵器	高环	14.2	11.0	11.3	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ	2方向に三角透かし
19-1	図版16	7号横穴墓 支室	須恵器	环蓋	13.0	-	4.1	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ	口部周縁内側や上方に比較 状の波紋
-2	図版16	7号横穴墓 支室	須恵器	环	12.6	-	4.1	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ	内面：圓軸ナデ、ナデ
-3	図版16	7号横穴墓 支室	須恵器	环身	12.2	-	3.9	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ切り	内面：圓軸ナデ、ナデ
23-1	図版16	10号後火葬 墓道	須恵器	环	-	(7.5)	-	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、ナデ	高台付
-2	図版16	10号横穴墓 墓道	須恵器	环	-	7.0	-	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転糸切	内面：圓軸ナデ、ナデ
-3	図版16	10号横穴墓 墓道	須恵器	高台付环	(12.2)	8.1	4.1	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ、ナデ	高台付
-4	図版16	10号横穴墓 墓道	須恵器	蓋	(12.5)	-	-	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ	外面にヘラ記号「メ」
27-1	図版16	表揮	須恵器	环蓋	(12.0)	-	4.2	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転ヘラ、ナデ	前部外面に1条の波紋
-2	図版16	表揮	須恵器	环身	(9.0)	-	(3.0)	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、回転糸切	内面：圓軸ナデ、ナデ
-3	図版16	工事中発見	須恵器	直口直腹	8.5	-	12.6	内面：圓軸ナデ、ナデ 外周：圓軸ナデ、ナデ	5号横穴墓及び6号横穴墓の斜 面下で丁字型足見
-4	図版16	表揮	須恵器	高环	10.5	-	-	内面：圓軸ナデ 外周：圓軸ナデ	脚部に2段2方向の透かし 上段は切れ目、下段は「三角透かし」 2段の透かしの間に1条の波紋
-5	出土地不明	須恵器	鉢底窓？	(10.8)	-	-	-	内面：圓軸ナデ 外周：圓軸ナデ	

### 出土遺物観察表（土器以外）

捲回番号	写真	出土地点	種 别	器種	長	幅	厚	備 考
8-2	図版14	1号横穴墓 支室	鉄製品	直刀	(79.4)	3.2	0.7	亮に錆が残る
-3	図版14	1号横穴墓 支室	鉄製品	直刀	(7.0)	(7.1)	0.5	側面型大型刀
10-5	図版14	2号横穴墓	鉄製品	刀子	12.4	1.5	0.6	
13-13	図版14	4号横穴墓 支室	石製品	礫石？	7.8	1.8	1.1	使用痕は明確でない
17-12	図版15	6号横穴墓 支室	鉄製品	直刀	(12.8)	3.3	0.7	裏及び刃身柄部の一部、刃羽、闊、柄の木質が残る

# 図 版

西谷海穴羣第2支群全貌(調査完了後)



## 図版2



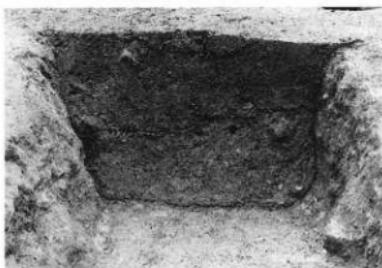
西谷横穴墓群第2支群空中写真



a群前地山加工状況



1号横穴墓完掘状況



1号横穴墓墓道横断土層堆積状況



1号横穴墓玄門から玄室縦断土層堆積状況



1号横穴墓玄室横断土層堆積状況



1号横穴墓(正面から)



1号横穴墓玄室須恵器床検出状況

図版3



1号横穴墓玄室須恵器床取り上げ後



1号横穴墓鉄刀出土状況



2号横穴墓完掘状況



2号横穴墓縦断土層堆積状況



2号横穴墓閉塞石検出状況



2号横穴墓玄門横断土層堆積状況

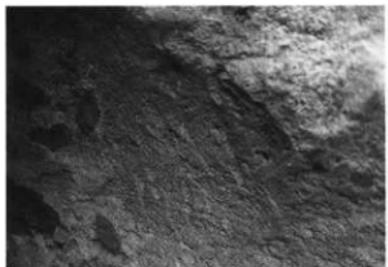


2号横穴墓玄室横断土層堆積状況



2号横穴墓玄室遺物出土状況

## 図版 4



2号横穴墓玄室壁面加工痕検出状況



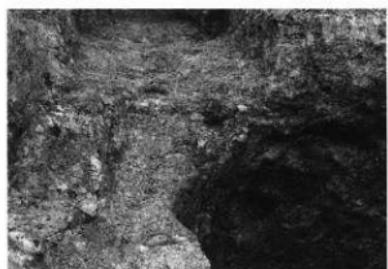
3号横穴墓完掘状況



3号横穴墓玄門横断土層堆積状況



3号横穴墓玄室横断土層堆積状況



3号横穴墓墓道及び4号横穴墓奥壁完掘状況



3号横穴墓墓道及び玄門完掘状況

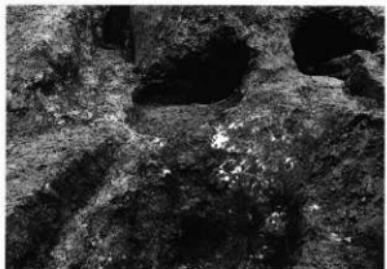


3号横穴墓玄室完掘状況(左は1号坑道)



4号横穴墓完掘状況(正面から)

図版 5



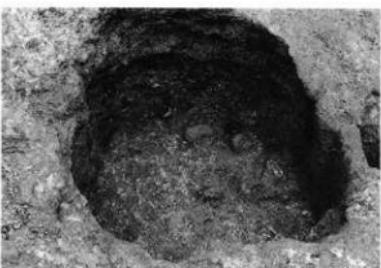
4号横穴墓検出状況



4号横穴墓玄門横断土層堆積状況



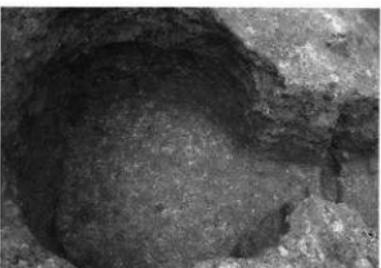
4号横穴墓玄室横断土層堆積状況



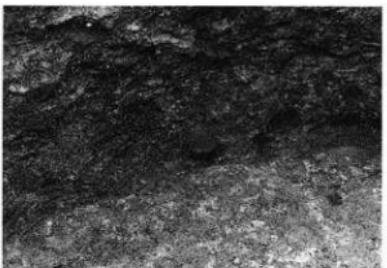
4号横穴墓玄室遺物出土状況



4号横穴墓玄室完掘状況



4号横穴墓完掘状況(上から)



4号横穴墓玄室排水溝検出状況



4号横穴墓玄門完掘状況

## 図版 6



5号横穴墓完掘状況



5号横穴墓縦断土層堆積状況



5号横穴墓墓道出土状況



5号横穴墓閉塞石検出状況



6号横穴墓完掘状況(正面から)



6号横穴墓完掘状況(上から)



6号横穴墓土層堆積状況

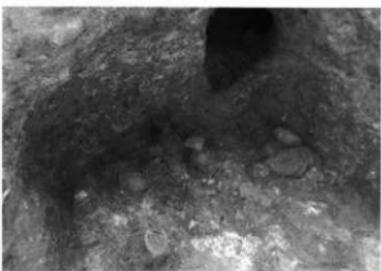


6号横穴墓縦断土層堆積状況

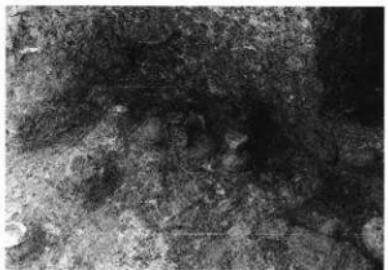
图版 7



6号横穴墓堵石检出状况



6号横穴墓玄室遗物出土状况 1



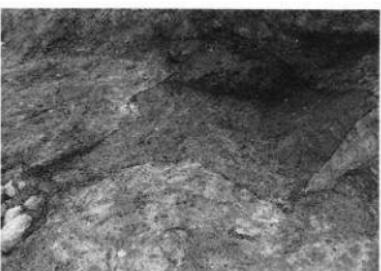
6号横穴墓玄室遗物出土状况 2



6号横穴墓铁刀出土状况



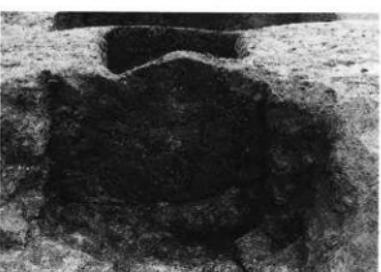
7号横穴墓完掘状况



7号横穴墓检出状况



7号横穴墓堵石检出状况



7号横穴墓玄门横断土层堆积状况 1

## 図版 8



7号横穴墓玄門横断土層堆積状況 2



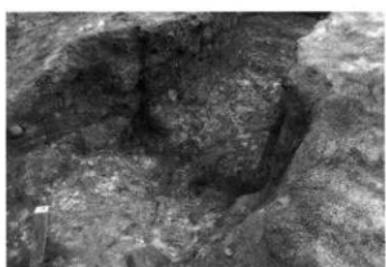
7号横穴墓土層堆積状況



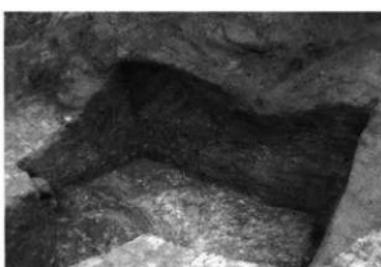
7号横穴墓横断土層堆積状況



7号横穴墓遺物出土状況



7号横穴墓墓道及び玄門完掘状況



7号横穴墓玄室完掘状況



7号横穴墓奥壁界線検出状況



5号横穴墓及び8号横穴墓完掘状況



8号横穴墓完掘状况



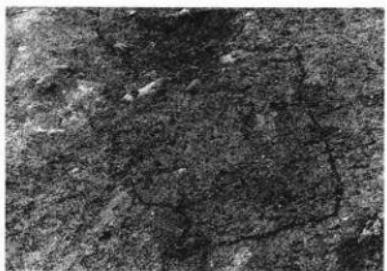
8号横穴墓玄室横断完掘状况



8号横穴墓切り込み棱出状况



9号横穴墓完掘状况



9号横穴墓棱出状况



9号横穴墓縦断土層堆積状况

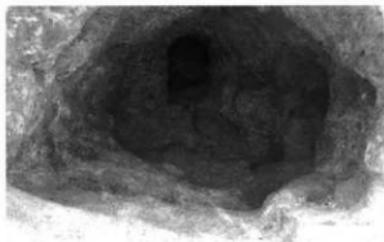


9号横穴墓閉塞石検出状况



9号横穴墓玄室縦断土層堆積状况

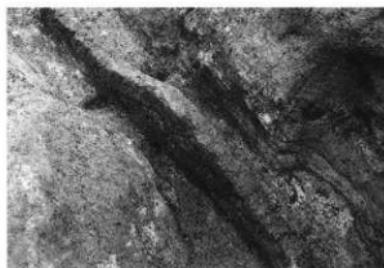
## 図版10



9号横穴墓玄室完掘状況



10号横穴墓完掘状況(正面から)



10号横穴墓縦断土層堆積状況



10号横穴墓完掘状況(上から)



1号小横穴完掘状況



1号小横穴土層堆積状況



1号小横穴横断土層堆積状況



1号小横穴奥壁検出状況